

歴史教育における記憶の取り扱いについて (4)

－「平和のかたち」の再考をもとに－

高橋 健 司

1. はじめに－戦争の記憶と「平和のかたち」－
2. 「平和」を表象する記念塔を巡って
 - (1) 広島県広島市南区皆実町緑地の「平和塔」
 - (2) 宮崎県宮崎市平和台公園の「平和の塔」
3. 「平和」を表象する銅像を巡って
 - (1) 長崎県北松浦郡佐々町三柱神社の「平和乃礎」
 - (2) 香川県仲多度郡多度津町桃陵公園の「一太郎やあい」
4. 変容する記憶と歴史教育

2007年度宮田研究奨励金の交付を受けた。

1. はじめに－戦争の記憶と「平和のかたち」－

戦争の記憶は、体験者や社会にとって、忘れられない記憶であり、また忘れてはならない記憶と認識されている。それゆえ、戦争の記憶を後世に伝えるために、人は記念碑やモニュメントを造り、記憶を「かたち」に託そうとする。そしてその「かたち」に「平和」という言葉を付した「平和のかたち」は、日本中至るところで目にすることができる。

ところが、こうした「平和のかたち」には、「平和を祈念する」という由来が刻まれることはあっても、「平和」自体についての説明は見られず、それが社会から疑問視されることもない。なぜなら「平和」とは、敢えて説明する必要がないほど明白で普遍的なものであるという了解が、造る者と見る者の間に存在するためである。

しかし、そこに「平和」の意味を吟味することなく、ただ言葉を鵜呑みにするような状況が生じてはいないだろうか。そして、それは「平和」の形骸化を招き、戦争の記憶を風化させる一因となっているのではないだろうか。

このような問題意識から、本稿では自明視される「平和」を再考するために、事例として広島と宮崎の二つの記念塔と、長崎と香川の二つの銅像を取り上げる。それは、いずれの記念物もかつて戦争（日清戦争、日露戦争、満州事変後の第一次上海事変、日中戦争）を肯定する文脈上に記念されたものであったにもかかわらず、敗戦後は一様にその「過去」を伏せて「平和」を祈念するものへと変身を遂げているからである。

各々の記念物は、どのようにして戦争を称えた記憶が忘却され、新たに「平和のかたち」となったのであろうか。そして、それらが表象する「平和」とは、一体何を意味するのだろうか。

そこで、実際に各地を訪ねてフィールド・ワークを行ない、「平和のかたち」を読み解くことを通して、歴史教育において「平和のかたち」から学ぶ意義について考察したい。

2. 「平和」を表象する記念塔を巡って

(1) 広島県広島市南区皆実町緑地の「平和塔」

広島市南区皆実町緑地にある「平和塔」は、地元では戦前から「タカの塔」と呼びならわされ、塔上に鳥のブロンズ像が据えられた、高さ約17メートルの石塔である。塔の台座の正面には「平和塔」の文字が、また台座背面には「昭和二十二年八月六日」と刻まれるのみで、その由来は何ら記されていない【図1.2】。

この「平和塔」は、原爆の記憶を留める被爆建造物の一つとして紹介されることが多いが、美術史を研究する木下直之氏は、かつてこれが日清戦争の「凱旋碑」であったことを指摘する⁽¹⁾。木下氏によれば、「凱旋碑」は日清戦争後の1896年（明治29年）に建立されたものであり、日清戦争当時、広島城内には大本営が置かれ、日本軍は宇品港から乗船して大陸へと渡り、再び宇品へと凱旋したことを記念して、宇品から広島市内へと向かう御幸通り・凱旋通りと呼ばれた大通りの傍らに、頂上に神武天皇の東征伝説に因んだ「金鷄」を載せ、正面に「凱旋碑」の三文字を刻んだとされる。

確かに1925年（大正14年）発行の『廣島市史』には、「凱旋碑」についての記述があり、そこには「皆実町御幸橋通りと比治山通り県道の分岐点に在り、明治二十七八年日清戦役の第五師団凱旋記念として当時の第五師団管下安芸・備後・備中・周防・長門・出雲・石見・隠岐・八箇国有志者の建設せる^(ママ)者なり、碑は全部花崗石を以て置み、頂上に金鷄を装置し、碑の総高五丈二尺なり」と記されている【図3】⁽²⁾。

ところが、現在の「平和塔」を見ると、「凱旋碑」の文字のあった痕跡は

何ら見られず、また台座の背面の「凱旋碑」の由来が書かれていた部分も完全に削り取られて、その上に「昭和二十二年八月六日」とのみ刻まれた状態になっている。これは一体何を意味するのであろうか。

木下氏は、敗戦後の社会から「軍国主義又は超国家主義的思想の宣伝鼓舞を目的とするものは撤去する」⁽³⁾ 状況の中で、「記念碑を存続させるためだけの改変としか思えない」、「それが『凱旋碑』であったことをきれいさっぱりと忘れよう」としたことを物語っていると指摘し、「誰ひとり金鷄には手をつけようとしなかった」、「金鷄を残すことは何の障害にもならないと判断された」ことから、「記念碑に付される言葉」さえ入れ替えてしまえば、「イメージを改変せずに、イメージの意味だけを無効にできる、とわれわれの社会は信じている」とする⁽⁴⁾。

これに対し、1985年（昭和60年）に国有地であった皆実町緑地が広島市に移管されることになり、附近の住民から頂上の「タカ」の像が「落ちそうで近寄れない」という苦情もあって⁽⁵⁾、移管前に広島市公園建設課が行なった「平和塔」の耐力調査によれば、「タカ」の腹部の「腐食消失」と嘴の「折損」とが報告されている⁽⁶⁾。調査当時の写真を見ても、嘴は人為的に「折損」された可能性が極めて高く、それは口を開けた姿の「ハト」をイメージさせる。一体いつ誰が「折損」したかは不明だが、17メートルもの高さのある塔に登って作業することは容易なことではなく、また大掛かりな工事を要することを考慮すれば、「平和塔」への改変工事が行なわれた「昭和二十二年八月六日」に、「金鷄」は「ハト」になったのではないだろうか【図4】。

とすれば、それは軍隊のシンボルであった「金鷄」を、「平和」のシンボルである「ハト」へと変身させる意図であったことが窺え⁽⁷⁾、当時こうした「平和」へのイメージの転換が、積極的に支持された可能性も考えら

れる⁽⁸⁾。

にもかかわらず、戦前から「タカの塔」と呼ぶことに慣れ親しんだ近隣の住民にとって、塔上の鳥は依然として「タカ」と映り、1985年（昭和60年）の補強工事によって、消失した腹部のみならず鋭い嘴もまた「復元」されて、戦前と同じ「金鷄」＝「タカ」の姿となった【図5】。

このように、「平和塔」への改変は、単に言葉の付け替えに留まらず、塔上の鳥も替えて「平和」を称えようとしたと考えられるが、背面に刻まれた「昭和二十二年八月六日」当時の広島において、「平和」はどのように記念され、また表象されていたのであろうか。

「昭和二十二年八月六日」を記念日とするのは、占領下の広島において開催された第一回広島平和祭である⁽⁹⁾。広島平和祭とは8月6日に広島平和記念公園で開催されている「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」の原点に当り、1947年（昭和22年）、広島市役所、広島商工会議所、広島観光協会が発起人となって広島市長を会長とする広島平和祭協会が設立され、同年から1949年（昭和24年）まで合計三回開催された（第四回は開催直前に中止されている）。

この「祭典」の目的は、「毎年八月六日を中心に盛大な『広島平和祭』を举行しこの事業を通じて広島市民が如何に平和を愛好しているかを表現し、やがては世界的行事の一つにまで発展させたい」⁽¹⁰⁾とするもので、当時広島では内外に「平和のメッカ」としての広島を積極的にアピールしようとする姿勢が見られた⁽¹¹⁾。実際、第一回広島平和祭はアメリカのライフ誌で特集が組まれるなど⁽¹²⁾、海外からの注目を集めた一方で、開催後に市民の間から「お祭り騒ぎをすべきではないとの批判がみられた」⁽¹³⁾ものもあった。

そして、「昭和二十二年八月六日」には、原爆ドームと川を挟んで向き

合う三角州北端の平和広場（旧・慈仙寺鼻，現・平和記念公園）で平和祭の記念式典が行なわれ，濱井信三広島市長が次のような「平和宣言」を発している。

「昭和二十年八月六日は広島市民にとりまことに忘れることのできない日であつた。この朝投下された世界最初の原子爆弾によつて，わが広島市は一瞬にして潰滅に帰し，十数万の同胞はその尊き生命を失い，広島は暗黒の死の都と化した。しかしながらこれが戦争の継続を断念させ，不幸な戦を終結に導く要因となったことは不幸中の幸であつた。この意味に於て八月六日は世界平和を招来せしめる機縁を作つたものとして世界人類に記憶されなければならない。（中略）この地上より戦争の恐怖と罪惡とを抹殺して真実の平和を確立しよう。永遠に戦争を放棄して世界平和の理想を地上に建設しよう。ここに平和塔の下，われらはかくの如く平和を宣言する」⁽¹⁴⁾。

この中で濱井市長は，原爆の投下は「世界平和を招来せしめる機縁を作つたもの」ゆえに「世界人類」に「八月六日」を記憶させようという意図を明らかにし，そのシンボルとして当日除幕式が行なわれたばかりの「平和塔」の下で高らかに宣言を行なっている。

では，この平和広場に建立された「平和塔」とは，どのようなものであつたのだろうか。戦前，慈仙寺鼻には慈仙寺という寺があり，原爆投下直後から境内で身元の分からない無数の遺体が茶毘に付されて，1946年（昭和21年）5月に原爆犠牲者の慰霊を目的とする「戦災死没諸霊供養」と書かれた木碑と市の礼拝堂が建てられ⁽¹⁵⁾，5月22日から27日まで原爆犠牲者供養週間が設けられた⁽¹⁶⁾。

これに対し，1946年（昭和21年）6月14日，広島市復興顧問のモンゴメリー中尉は，当時の木原広島市長に対し「市長の意向としては戦災者の

供養塔を建てる計画をすすめているが、私はこれを供養塔でなく、世界永遠の平和のシンボル国際平和記念塔としてほしい⁽¹⁷⁾、と注文をつけている。それは慰霊活動が原爆を投下したアメリカ批判へと結びつくのではないかという進駐軍側の懸念を窺わせ、原爆投下を積極的に意味付ける記念行為を求めたと考えられる。

そして木原広島市長は、原爆投下一周年の1946年（昭和21年）8月6日、広島市町会連盟主催の平和復興祭において、「本市がこうむりたるこの犠牲こそ、全世界にあまねく平和をもたらした一大動機を作りたることを想起すれば、わが民族の永遠の保持のため、はたまた世界人類恒久平和の人柱と化した十万市民諸君の霊に向かって、熱き涙をそそぎつつも、ただ感謝感激をもってその日を迎えるのほかないと存じます」という、メッセージを発している⁽¹⁸⁾。

こうした経緯を経て、翌1947年（昭和22年）、原爆投下二周年を記念して、進駐軍の承認を得た上で大々的に平和祭が開催されることになり、既に供養碑が立っていた慈仙寺鼻を平和広場と改称し、そこに新たに「平和塔」が建立された。それは、高さ10メートルの木造の塔であり、塔の上部に「平和の鐘」が吊り下げられ、塔の各側面には「平和塔」の三文字が取り付けられたものであった⁽¹⁹⁾。そして8月6日に開催された第一回平和祭の式典において除幕式が行なわれ、「平和の鐘」が鳴らされると共に、「平和塔」の下で濱井新市長による先の平和宣言が行われたのである。

進駐軍政下の広島において、モンゴメリー中尉の指摘に見るように、「供養塔」と「平和塔」とが分けて考えられていることに注意する必要がある。そして「平和塔」で表象すべき「平和」とは、「世界人類恒久平和の人柱」に「感謝感激」するものであり、また「不幸な戦を終結に導く要因となったことは不幸中の幸」とするものであった。すなわち、当時「平和」は、

原爆投下を肯定する文脈上に位置付けられ記念されるべきものであったと言える。

そして、翌1948年（昭和23年），再び「平和塔」の下で第二回平和祭が開催されたが，進駐軍を代表して英連邦軍総司令官ロバートソン中將が次のような「記念講演」を行なっている。

「余はこの災害は諸君自らがもたらしたものであることを注意したい。日本国民は不法にも何ら予告なくして英連邦諸国及びアメリカ合衆国に攻撃を加えその国民に甚大なる損害を与えた。これは実に背信行為であった。何故ならアメリカ合衆国は常に諸君の友邦であったし我々連邦国民も亦諸君の友邦たるばかりでなく，長年に恒る諸君の同盟国であったからでもある。広島に下されたこの天罰は軍国主義を追求せる日本国民全体への応報の単なる一部をなすに過ぎないのである。若し将来諸君が平和主義を遵奉するならば全世界はかかる悲劇からより安全たるを得るのである」⁽²⁰⁾。

このように「平和塔」をシンボルとした平和祭は，原爆投下を正当化する進駐軍の強い影響下に開催されたものであり，現在の「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」とは大きく異なる，犠牲者の慰霊から程遠い式典であったと言えよう。

ところが，朝鮮戦争の勃発を背景に1950年（昭和25年）の第四回広島平和祭が取り止めとなった翌年の5月，平和広場の「平和塔」は撤去され，平和記念公園の建設が押し進められた。当時の新聞を見ると「永遠に姿消す平和塔」というタイトルの下に，撤去の理由として「都市美観上と同地が記念公園となるためその必要性を認めなくなった」ことに加えて，「二十五年度の平和祭中止と管理不行届による板ベイのはぎ取り“平和の鐘”盗難（本年三月）などが市民のヒンシュクをかっていた」ことが挙げられ，塔の所有者である平和協会（会長濱井市長）の全員が塔の除去に賛成した

とされる⁽²¹⁾。

同じ慈仙寺鼻にあった供養碑と礼拝堂が、1955年（昭和30年）8月に「原爆供養塔」として新たに建て替えられたのに比べて⁽²²⁾、「平和塔」が再建されることはなく、それは8月6日の行事が「慰霊式」へと転換したことを印象付ける⁽²³⁾。そして「世界永遠の平和のシンボル」となることを期待された「平和塔」の消滅は、独立を果たした社会にとって、もはや占領下の「祭典」の記憶が「不要」となったことを象徴している。

これに対し、皆実町緑地の「平和塔」は、平和広場の「平和塔」とは対照的に、今なおそこに立ち続けている。その台座背面に刻まれた「昭和二十二年八月六日」の記憶が失われる一方で、「歴史遺産」として見直され、塔上の鳥は建立時の姿へと「復元」された。

しかし、「ハト」を「金鷄」へと「復元」したことは、かつて「金鷄」を「ハト」へと改変して戦争を称えた記憶を払拭したように、占領下で称えた「平和」の痕跡を消し去り、新たな「平和」の記憶を刻もうとするかのようなものである。すなわちそれは、原爆投下を肯定するものから否定するものへと、「平和」が読み替えられたと言えるのではないだろうか。

(2) 宮崎県宮崎市平和台公園の「平和の塔」

宮崎県宮崎市平和台公園には、「平和の塔」と呼ばれる高さ約37メートルもの巨大な塔が立っている。塔の正面には「八紘一字」の文字が、背面には「紀元二千六百年」の文字が大きく刻まれ、周囲には巨大な四つの陶像が設置されている。かつてこの塔は、「紀元二千六百年」に当る1940年（昭和15年）11月25日に建立され、「八紘之基柱」^{あめつちのもとほしら}（通称「八紘基柱」）と名付けられて、紙幣や切手の図案にも用いられるなど広くその名が知られたものであったが、戦後になって「平和の塔」となっている【図6.7】。では、この「八紘基柱」から「平和の塔」への変身は、どのようにして行われたのだろうか。

現在、「平和の塔」の基壇の階段上り口左側には、1971年（昭和46年）に黒木博宮崎県知事によって刻まれた「県立平和台公園」の「由来碑」が建立されており、ここには次のように「平和の塔」の由来が説明されている【図8】。

この公園は、紀元二六〇〇年記念事業として県奉祝会が中心となり県内はもとより広く国内外の有志の協賛をえて、「八紘之基柱」^{あめつちのもとほしら}の建設と広場二六〇〇坪（八五八〇平方メートル）の造成を行ない昭和一五年一月二五日に完成した。

この台地は、神武天皇ご東征当時の宮居の跡といわれる「皇宮屋」の北部に位置し、海拔六〇メートル、下北方古墳群に囲まれている。台上の塔は、高さ三六・四メートルで国内各地をはじめ当時世界各地に在住した日本人団体及び友好諸国から寄せられた切石一七八九個を含む石材八三四立方メートルで築かれ、作業員は奉仕団を含め延べ六六五〇〇人、総工費六七万円を費している。

塔は日名子実三氏の設計になり、外形は神事に用いるご幣を象徴しており、左に向かって荒御魂（武人）、奇御魂（漁人）、幸御魂（農民）、和御魂（工人）の四像を配し、昔の生活風俗をしのばせている。

正面には、秩父宮雍仁親王殿下の真筆による「八紘一字」の文字が永遠の平和を祈念して刻みこまれているが、終戦の昭和二〇年八月にはその精神が戦争目的に利用されたとして削除され、「荒御魂」像もまた武力を象徴するものとして取り除かれ、その後、塔は「平和の塔」と呼ばれるようになった。

しかし、昭和三二年四月九日に都市公園の決定をうけて公園整備が進むにつれ、美術工芸品としての塔の完全復元と保存の機運が台頭し三七年三月一日に、はにわ園、はにわ館が設置され三九年のオリンピック東京大会の際は、国内聖火リレー第二コースの起点に選ばれ、九月九日この地に運ばれた聖火は翌一〇日県民歓送のうちに東京への第一歩をふみ出した。これが機縁となり、オリンピックの主会場であった東京都の日比谷公園との姉妹公園の縁を結んでいる。

なお、県立都市公園としては、昭和三五年度から四五年度まで数次にわたる年次整備計画に基づき、県・市民の憩いの場として拡充整備をすすめ、神話の国みやざきを象徴するにふさわしい姿を整えるにいたっている。

この中で黒木知事は、「『八紘一字』の文字が永遠の平和を祈念して刻みこまれている」とし「その精神が戦争目的に利用された」と述べるが、「八紘一字」の解釈を巡っては、この言葉自体が「世界支配をめざす造語」であるとする批判があり⁽²⁴⁾、今なお鋭い対立が続いている。

これに対し、かつての「八紘基柱」には、三ヶ所に建立時の由来や言葉が刻まれた銅版がはめ込まれていたが、すべて敗戦時に剥がされ破壊された【図9】。このうち、現在の「由来碑」が設置されている場所には、建

立当時の「由来碑」があったとされ、その文章は未だ不明だが⁽²⁵⁾、塔正面入り口左側にあった「八紘之基柱定礎之辞」と、塔背面の「八紘之基柱大日本国勢記」の文章は、「『平和の塔』の史実を考える会」によって明らかにされている。それによると、1940年（昭和15年）の「八紘之基柱定礎之辞」には次のような言葉が刻まれていたとされる⁽²⁶⁾。

恭シク惟ルニ、日向ハ大日本ノ祖国、天祖コヽニ降誕シ、天孫コヽニ降臨シ、実ニ我ガ神聖ナル皇室発祥ノ聖地タリ。恰モ皇紀二千六百年ノ嘉辰ニ当リ、畏クモ神武天皇皇居ノ靈域ヲトシ、八紘之基柱ヲ建設シ、以テ宏遠ナル肇国ノ理想ヲ中外ニ宣揚シ、無辺ノ皇徳ヲ永遠ニ虔仰シ奉ラントス。伏シテ願ハクバ、昊天后土、常磐堅磐ニコノ聖柱ヲ鎮護シ、千秋万古、皇国ノ昌運ヲ靈助シ給ハンコトヲ。稽顙敬拝。

この中で「八紘基柱」の建立の目的は、「皇紀二千六百年」を記念して神武天皇の「宏遠ナル肇国ノ理想ヲ中外ニ宣揚シ、無辺ノ皇徳ヲ永遠ニ虔仰シ奉ラン」とすることであり、それによって「皇国ノ昌運ヲ靈助シ給ハン」ことを願ったことが分かる。一方、「八紘之基柱大日本国勢記」には、次のような言葉が刻まれていたとされる⁽²⁷⁾。

大日本帝国ハ神国ナリ。遼邈ノ世、二尊大八洲ヲ生成シ、天照大神筑紫日向ノ橘ノ小戸ノ櫛ヶ原ニ降誕シ給フ。尋デ天孫瓊々杵尊、天壤無窮ノ神勅ヲ受ケ、三種ノ神器ヲ奉ジ、日向ノ高千穂ノ櫛触峰ニ降臨シ給ヒ、三代相承ケ、養正・積慶・重暉ノ皇徳ヲ宣布シ給フ。神武天皇天業ヲ恢弘スベク、国中ノ精鋭ヲ率キ、此ノ地ヲ発シテ東遷シ、大和橿原宮ニ即位シ給ヒ、万代不易ノ皇基茲ニ確立ス。

爾来、皇統連綿トシテ、歴朝聖徳無辺、億兆匪躬ノ臣節ヲ竭シテ、国運年ト共ニ隆昌ナリ。殊ニ明治維新ノ鴻業成ルヤ、文教武備大ニ興リ、日清・日露ノ両役及ビ第一次世界大戦役ヲ経テ、国威弥々宣揚シ、皇化益々普洽

ス。昭和六年，満州事変起ルニ及ビ，東洋平和ノ為メニ凶醜ヲ攘ヒ，遂ニ友邦満州帝国ノ創建ヲ見ル。昭和十二年，支那事変勃発スルヤ，東亜永遠ノ平和確保ノ為メ国家ノ総力ヲ拵ゲテ之ニ当ル。聖戦既ニ四歳，皇意ノ及ブ所，北ハ黒竜江畔ヨリ，西ハ蒙疆ノ荒野ニ亙リ，北・中・南支ヲ連ネテ，遠ク南海ニ至ル。帝国ハ全面積四万二千二百十二平方里，総人口約壹億ヲ算ス。

極東 千島占守島東崎 北緯 五十度 四十五分五十七秒
東経 百五十六度 三十分四十八秒

(中略)

極北 サイパン ウラカス島 北緯 二十度 三十二分四十二秒
東経 百四十四度 五十三分四十二秒

今ヤ聖代ノ下，紀元二千六百年ノ佳歳ヲ迎フ。会々第二次世界大戦役起リ，帝国ハ内，万民翼賛ノ新体制ヲ確立シ，外，独逸・伊太利ト盟約シ，世界新秩序建設ノ偉業ニ邁進シ，以テ八紘一字ノ大理念ヲ顕現セントス。

コノ靈域ニ詣デ，コノ基柱ヲ仰グモノハ，宏遠ナル祖宗肇国ノ御理念ヲ敬崇シ無極ノ皇恩ニ感孚スルト共ニ，益々雄健ナル国民精神ヲ振作シ，愈々尽忠報国ノ赤誠ヲ輪スベキ也。

ここには帝国の歴史と領土が刻まれ，「帝国ハ内，万民翼賛ノ新体制ヲ確立シ，外，独逸・伊太利ト盟約シ，世界新秩序建設ノ偉業ニ邁進シ，以テ八紘一字ノ大理念ヲ顕現セントス」との決意を表し，「宏遠ナル祖宗肇国ノ御理念ヲ敬崇シ無極ノ皇恩ニ感孚スルト共ニ，益々雄健ナル国民精神ヲ振作シ，愈々尽忠報国ノ赤誠ヲ輪スベキ」と結んでいる。

このように，問題とされる「八紘一字」自体の説明は見られず，それは「宏遠ナル肇国ノ理想」，「宏遠ナル祖宗肇国ノ御理念」とされるに留まっているが，既に建立時から「八紘基柱」が，「平和の塔」に先駆け「平和」

を表象していたことは注目に値する。ただし、それは「満州事変起ルニ及
び、東洋平和ノ為メニ凶醜ヲ攘ヒ」、「支那事変勃発スルヤ、東亜永遠ノ平
和確保ノ為メ国家ノ総力ヲ拵ゲテ之ニ当ル」という文脈上に用いられ、中
国との「聖戦」の「大義」として掲げられた「平和」であった。

それでは、「八紘基柱」の発案者である相川勝六宮崎県知事は、どのよう
な考えに基づき「八紘基柱」を建立したのであろうか。1938年（昭和13
年）12月5日の通常県会において、相川知事は「皇紀二千六百年の記念事
業」に臨む姿勢について次のように述べている⁽²⁸⁾。

「神武天皇が日本を肇国される時の大きな御精神、さらにその御精神が現
在の日本の東亜を経^(ママ)論し、世界に臨む一つの大きな精神になっている。そ
ういう一つの大きな精神が日向の地において起つたのだとわれわれは考え
る。それで神武天皇の御言葉の中に八紘を掩いて宇となすというきわめて
遠大なる御言葉がある。あるいは天下皇沢、六合照徹というような非常に
良い神武天皇の建国の御理想というものがある。それが日向の地において
いよいよ最後の具体的のお決意をお決めになって、そうしてここから御発
進になって日本の肇国ができています。その精神が二千六百年間日本に脈々
として続いてきて、そうして今日の東亜の天地に拡充され、世界に向かっ
ている、この精神を日向の地で現わすなにか具体的なものを作りたい」。

そして相川知事は、その具体的計画として「永久に残るような壮大なる
御柱」を挙げ、そこには「高貴のお方をお願いして、そこに八紘を掩うて
宇となすというお言葉であるか、あるいは天下皇沢という文字であるか、
そういう御親筆」を彫刻し、100年後に「日本の国力はここまで伸びた、
東洋が現実に日本の力によつてこうなつたというふうな一つの、神武天皇
の八紘一字の御精神が二千六百年を基調としてどれだけ進展しているか」
を知るため、「二千六百年の祝典の行なわれる時の人口、国土はどの位ある

か、日本の勢力、すなわち、陛下の御稜威がどれだけ及んでいるか」や、「満州国とは一体不可分の関係になつて、そうして満州国ができています。支那にはこういう政権ができています」といった「大事なこと」を銘記して、「日本の各府県からはもちろん、朝鮮も、台湾も、樺太も、それからできれば満州も、北支も、中支も、シンガポールでも、香港でも、アメリカでも、そういう方面で日本の八紘一字の皇威の及ぶところ」や「神武天皇が美々津の港より御発進になつて大和の地にお出でになりまする道筋の各町村」から石を集めて「そういうものを土台にして八紘一字の大精神が盛り上つているようなもの」を造るとしている⁽²⁹⁾。

また、実際に制作を行なった彫刻家日名子実三は、「八紘基柱」をどのように捉えていたのであろうか。1940年（昭和15年）の建立時に日名子は、「八紘之基柱は、紀元二千六百年に方り、宮崎県奉祝会が、八紘一字の御精神を、悠久に、一大具現物として、具現し奉り、皇民精神修養根本道場たらしむべく、畏くも秩父宮殿下の、御尊筆を賜り、官幣大社宮崎神宮の北方二軒、神武天皇御東征御軍議の聖蹟地八紘台（高さ五十米の丘）上に、東は霊地櫛ヶ原を隔てて黒潮躍る太平洋を、西には、霊峯高千穂を指呼の間に望み、南は大淀の流れの千載に清きを眼下に見下し、我等が遠祖の眠る十七基の古墳群にかこまれて、二千六百坪の大広場を控えて立つ百二十尺の皇土の基柱であります。（中略）基柱の基底部、玉垣をめぐるしたる十五間四面の礎石は、内地の津々浦々より、又皇軍第一線の各部隊より、遠くは南米及独乙の在留邦人より、各々由緒ある各地の石材の献納を受けたもの二千個を以て築き上げ主柱部は鉄筋コンクリート建日向石舗装の耐震保久の構成とし、其形状は神籬ひもろぎに想を得て、書紀にある天皇盾を立て、雄叫びをなされ給いし故事により、盾の形を組み合せて、之を幣帛の形になぞらへ、正面に御尊筆『八紘一字』の四文字を謹刻し奉り、四周に、荒

魂，和魂，奇魂，幸魂の陶製四魂像（高サ一丈五尺）を配してあります」⁽³⁰⁾と記している。

さらに日名子は、塔の外側だけでなく内部も手がけているが、彼が制作した塔正面の「神武天皇御東征美々津出航の大軍船隊の浮彫のある大銅扉」の奥には、「巖室^{いづむろ}」と呼ばれる空間が設けられ、そこには「御尊筆」を納めた「校倉風の奉安庫」が、四周の壁に貼り巡らされた石膏製の八枚のレリーフと共に設置されている⁽³¹⁾。このレリーフは、いずれも日名子の作品で、右側の三枚は「大国主命国土奉還」，「天孫降臨」，「鵜戸の産屋」という紀元前の神話世界が表現され、左側の三枚は神武天皇の「橿原の御即位式」，「明治大帝御東遷」，「紀元二千六百年興亜の大業」(万邦平和)⁽³²⁾という神武天皇に始まる「歴史」が表現され、また「奉安庫」の両側面には、「南米大陸の図」，「大東亜の図」と呼ばれる地球が表現されて、南米に向かう移民船と太平洋を睨む戦艦とが刻まれている【図10】。

この中でも特に、「紀元二千六百年興亜の大業」(万邦平和)の図は示唆に富んでいる。それは古代の装束を身にまとい鏡で光を照らす女神の周りを、「日・満・支」の三人の子どもたちが手をつないで囲み、女神の足元には満州を走る特急アジア号や産業の発展が、女神の背後には日本兵が着剣して進軍する姿が刻まれているからである。これは先に見た「八紘之基柱大日本国勢記」と同様に、「万邦平和」は武力によって築かれるという世界観を如実に表している【図11】。

このように、相川や日名子は、「八紘一字」あるいは「天下皇沢」という「日本の勢力」すなわち「陛下の御稜威」を「かたち」に表すために、「日本の八紘一字の皇威の及ぶところ」，「皇軍第一線の各部隊」から1720個もの石を集めて「八紘基柱」の礎石とし⁽³³⁾，また皇威を称えるレリーフを制作している。では何ゆえ、当時これほど大規模な記念事業を行い、皇威

を誇示する必要があったのだろうか。

そこで、「紀元二千六百年」を取り上げた国定教科書『初等科国史』の「大御代の御栄え」を見ると、そこには「わが国は、尊い戦を進めながら、かがやかしい紀元二千六百年を迎えたのであります。三国同盟が成立したのも、新しい支那と条約を結んだのも、この年、すなわち昭和十五年のことです。かしこくも天皇陛下は、このめでたい年の紀元節に、詔をおくだしになつて、国民すべてが、神武天皇の御創業をおしのび申しあげ、いかなる難局をも切り開くやうにと、おさとしになりました」と記され、続けて「宮城前の式場」に「紀元二千六百年奉祝の式典」が催され「式場をうづめた参列者は、大君の尊い御姿を仰ぎ、ありがたい勅語をたまはつて感きはまり、声をかぎりに、万歳を奉唱しました。津々浦々の民草もまた、これに和し、奉祝の喜びのうちに、遠く国史をふりかへつて、難局打開の覚悟を新たにしました」と記されている。そして、「万世一系の天皇は、いつの御代にも、深い御恵みを民草の上にお注ぎになり、国力は時とともに充実し、御稜威は遠く海外にかがやき渡りました」、「いつたん外国と事の起つた場合には、国民こぞつてふるひたち、戦線・銃後ともどもに、力を合はせて国難を打開しました」、「わが国では、一見世の中が乱れたやうな場合でも、決して国の基を動かすやうなことはありません。かうしたことは、わが国だけに見られることで、すべては御稜威のかがやきであり、尊い国がらの現われでもあります」と結ばれている⁽³⁴⁾。

ここには「いかなる難局をも切り開く」、「難局打開の覚悟」、「国難を打開」といった言葉が繰り返し用いられ、「尊い戦」という表現とは裏腹に、戦争が「国の基を動かす」のではないかという恐れが感じられる⁽³⁵⁾。そして、この長引く戦争による社会不安を、振り払おうとするかのように「御稜威」が用いられていることから、「八紘基柱」の建立も同様に、皇威を

称えて「国の基」が「揺るぎない」ことを、巨大な「かたち」に託して世に知らしめた、と言えるのではないだろうか。

しかし、敗戦を迎えて戦争の「大義」が崩壊すると同時に「八紘基柱」の存在意義は失われ、それは塔正面に刻まれた「八紘一字」の文字の削除と、「荒御魂」像の破壊、そして台座から旧「由来碑」，「八紘之基柱定礎之辞」，「八紘之基柱大日本国勢記」の三つが削り取られるという「かたち」の変化をもたらした。広島「平和塔」同様、敗戦後の社会から「軍国主義又は超国家主義的思想の宣伝鼓舞を目的とするものは撤去」される状況の中で、巨大で記憶に新しい「八紘基柱」が「撤去」される可能性は極めて大きかったと考えられる。

この敗戦時の「八紘基柱」について、1959年（昭和34年）の『宮崎市史』によれば、「終戦直後進駐してきた連合軍の感触にさしさわりがあつてはならぬという心遣いから、特に故秩父宮殿下の御染筆に基いて四尺四方の郷土産^(ママ) 灰石に拡大謹刻した額石を取りはずしたばかりか、基柱の四隅に設けられた和魂（にぎみたま、平和）、荒魂（あらみたま、勇氣）、奇魂（くしみたま、創造）、幸魂（さちみたま、収穫）のうち、荒魂が武人像で表現されていたのを慮り、その一体だけ打ちくだいて取り除き、今なおそのままの状態にさらしている。そして基柱の名称も『平和の塔』と変更された」⁽³⁶⁾とされる。

また、1967年（昭和42年）の『宮崎県政八十年史』では、宮崎に進駐したアメリカ軍の副隊長であったマクスマン少佐から「八紘台の塔に禁制の『八紘一字』の文字があり、なお背面に穏当ならざる碑文があると巖達があった」が、少佐が「私見としては、文字なり碑文を平和的なものにとりかえ、また武神像を取り除いて平和的な神像に替えるならば良いのではないか」と言ったので、「八紘之基柱」から「荒御魂」像および「八紘一字」

の文字等が取り除かれ、「その後沈滞した約十五年間を経過するに至った。この間、誰いうとなく『平和台・平和の塔』と呼ばれるに至った」⁽³⁷⁾とされる。

「八紘基柱」から「八紘一字」の文字を削除し、「荒御魂」像を破壊したのが、「連合軍の感触にさしさわりがあつてはならぬという心遣い」なのか、進駐軍の「厳達」なのか、見解が大きく食い違うが、「平和の塔」という呼び名もまた、「変更」されたのか、「誰いうとなく」呼ばれるに至ったのか、曖昧な点が多い。正式に条例によって「八紘台」が「県立平和台公園」となったのは1964年（昭和39年）4月である⁽³⁸⁾。いずれにせよ宮崎では、敗戦直後に「平和の塔」の「平和」を積極的に意味付けようとする姿勢は見られず、「八紘基柱」から「平和の塔」へと呼び替えたのは、「聖戦」を称えた記憶を消し去り、塔（柱）を存続させるための方便であったと考えられよう。

ところが、撤去された「八紘一字」の文字と破壊された「荒御魂」像は、後年になって「復元」されている【図12】。一体この二つはどのようにして、復活を遂げたのだろうか。

『宮崎県政八十年史』によれば、「経済界の進展に伴うレジャーブームの波に乗り、年々この地を訪れる観光客が増加するに至ったので、平和台について、一般にその整備要望の声が再三起こってきた」ことを理由に、1961年（昭和36年）度に観光施設「はにわ園」が「平和の塔」の脇に整備され、次いで翌年10月5日に「荒御魂」像が「復元」された⁽³⁹⁾。この新たな「荒御魂」像は、彫刻家上田喜久丸が制作し、宮崎交通社長の岩切省一郎によって寄贈されたものであった⁽⁴⁰⁾。

このように、「荒御魂」像の復活の背景には、宮崎が戦前の「皇国の郷」から「60年代に急成長する新婚旅行のメッカ」⁽⁴¹⁾へと変貌を遂げ、「平

和の塔」が神話的世界を醸し出す観光資源として見直されて、「県外観光客がバスで繰り込む名所」⁽⁴²⁾となったことが挙げられる。

そして、「八紘一字」の文字が復活した背景には、1964年（昭和39年）の東京オリンピックの開催がある。このオリンピックにおいて「平和の塔」が聖火リレーの第二コースのスタート地点となったことで「平和の塔」は脚光を浴び、「平和と友愛の祭典第一歩が、ここから出発することになった」⁽⁴³⁾と語られるようになった【図13】。このような状況の中で12月26日、「八紘一字」の文字復元申請書が、宮崎県観光協会会長の岩切章太郎から提出されるや否や、翌年1月8日には許可され、申請から僅か一ヶ月後の1965年（昭和40年）1月28日、遂に「平和の塔」正面に「八紘一字」の文字が「復元」されたのである⁽⁴³⁾。

この「八紘一字」の性急な復活に対しては反発の声が上がり、観光協会事務局長を務めた地村忠志氏の回想によれば、「八紘一字」の文字の撤去を求めた抗議に対して、地村氏は次のように語ったという。

「あの平和の塔と、撤去されていた八紘一字の文字や武人像は、立派な芸術作品ですよ。元の姿に戻すのが当然でしょう。それでなければ、日名子実三という制作者に対して申し訳ない。だから復元したんです。（中略）仮に撤去しても、歴史というものは変わるものではないでしょ。歴史は厳然として変わらないはずです。あの平和の塔の八紘一字の文字を見て、再び戦争をやろうという気持ちになる人はいないはずですよ。戦争の具には使われましたが、ほんとうの平和の意味が誤解されている。世界史の中でも、ナポレオン戦争のときの凱旋門や、ナポレオン道路といった史跡はいまでも残っている。こうした歴史的遺跡を、文化遺産として後世に残すことが、歴史というものでしょう」⁽⁴⁵⁾。

「八紘一字」の文字を復活させたことで、かつての「八紘基柱」の記憶が

呼び覚まされた結果、戦後の「平和の塔」との整合性が問われて、地村は「戦争の具には使われましたが、ほんとうの平和の意味が誤解されている」と答えている。ここに「平和の塔」の「平和」とは何かが、大きな問題となったのである。

これに対し、「八紘一字」の復活を擁護するために、「八紘基柱」を建立した元宮崎県知事の相川勝六が再び登場する。相川は戦後宮崎選出の衆議院議員となり、「古い、由緒ある日本の建国が、われわれ日本民族にとって唯一の誇りである」⁽⁴⁶⁾として、1966年（昭和41年）、かつては「紀元節」であった2月21日を国会で「建国記念の日」に制定させているが、1968年（昭和43年）に「八紘基柱－平和の塔の由来」を著し、この中で「八紘一字は平和の大理想」と、次のように論じている。

「八紘一字とは神武天皇が橿原の宮で、ご即位のとき仰せられた『八紘をもって宇となさん』というお言葉である。八紘とは^{あま}天が^{した}下、つまり全世界の意味である。全世界を一つの家とする。わが日本はこれから世界のすべての国々と、お互いにおなじ家族の一員の如くにして助けあい、協力しあって、仲良く平和につきあっていきたいというお考えである。いわば現在の世界連邦の思想といってもいいのではないかと思う。これこそ最高の理想主義、平和主義の思想であり日本が建国の昔から平和で理想国家たるゆえんである」⁽⁴⁷⁾。

さらに相川によれば「八紘基柱は大きな御幣」であり、「われわれ日本人の考え方からすれば、自分の罪けがれを祓いつくすときに、清明の本心があらわれるのである。（中略）この心境で一心に神前にぬかづくとき、一切を離脱して清明の心となり、神に帰一する。この心境で家庭にのぞめば一家は円満である。この心境で公につくせば仁愛に満ちた公僕となる。この心境で不正不義と戦えば無双の強者となる。この心境で国際問題を処理す

れば平和の実現がはかれる」ゆえに、「この大御幣をふるえば世の中の平和が実現する。八紘基柱を平和の塔と呼ぶのは、実に当然の帰結であって嬉しい限りである」とする⁽⁴⁸⁾。

このように、「八紘一字」の文字を「復元」した後で、「八紘基柱=平和の塔」に整合性を持たせるために、「八紘一字」は最初から「平和の大理想」を表す言葉であり、日本は「建国の昔から平和で理想国家」であったとする根拠が創出され、これが先述の1971年（昭和46年）に建立された黒木宮崎県知事による「由来碑」へと受け継がれて、「八紘一字」は建立時から「永遠の平和を祈念」したものであったという、新たな記憶を石に刻んでいる。

そしてこの新たな「平和の塔」の記憶が定着した結果、個人の回想の中にもその影響が見られるようになり、例えば敗戦時において進駐軍に対し市民が、「八紘一字のもともとの意味は、世界が一家族のように仲良くという平和の理念」であり「悲しいことにそれが為政者に利用されたのです。日本人というのは本来争いを好まぬ農耕民族です。新しい日本を創出したあの明治天皇も平和を強く要望されています」と訴えたことが実って「戦争のシンボルとして破壊される運命にあった塔を、何とか残すことが出来た」というエピソードが語られるようになっている⁽⁴⁹⁾。

しかし、先に地村氏が「元の姿に戻すのが当然」と言いながら、「平和の塔」は決して「元の姿」になってはいない。かつて「八紘基柱」にあった旧「由来碑」, 「八紘之基柱定礎之辞」, 「八紘之基柱大日本国勢記」の三点は、いずれも「復元」されておらず、それは慎重に取捨選択された「かたち」の復活であった。

これはすなわち、「八紘之基柱大日本国勢記」に刻まれていた、武力によって確保される「東洋平和」や「東亜永遠ノ平和」の記憶は、「平和の塔」

にとって「不要」なものであり、また現在の「由来碑」が表象する「平和」とは相容れないものであることを物語っている。それゆえ宮崎でも、「平和の塔」の「平和」は、戦争の「大義」から戦争を否定する「理想」へと、読み替えられたと言えるのではないだろうか。

3. 「平和」を表象する銅像を巡って

(1) 長崎県北松浦郡佐々町三柱神社の「平和乃礎」

長崎県北松浦郡佐々町の三柱神社境内に、「平和乃礎」と刻まれた一体の兵士の銅像が立っている。その姿は両手でロケット状の筒を抱え、また台座の正面には、半円形のレリーフに戦場で三人の兵士が破壊筒を下げて進む「肉弾三勇士」の姿が刻まれており、これがかつて「肉弾三勇士」の一人として名を馳せた、佐々町出身の北川丞の銅像であることが分かる【図14】。

「肉弾三勇士」とは、満州事変が飛び火して起きた上海事変において、1932年（昭和7年）2月22日に爆薬筒を抱いて敵陣に突入し爆死した、工兵隊一等兵（死後伍長に昇進）の作江伊之助、北川丞、江下武二の三名を指し、新聞各社が「三勇士美談」として報道するや、陸軍はこれを覚悟の自爆として顕彰、三人は「肉弾三勇士」、「爆弾三勇士」と呼ばれるようになって、その人気は国民の間に異常な勢いで広がったとされる⁽⁵⁰⁾。

銅像の台座に背面には、当時の社会から「三勇士」に与えられた賛辞を記憶に刻もうとするかのように、第九師団長陸軍中将植田謙吉による1932年（昭和7年）2月22日付の「感状」が、次のように刻まれている【図15】⁽⁵¹⁾。

昭和七年二月二十二日拂曉 混成第二十四旅団碇歩兵大隊カ廟巷附近ノ敵陣地ヲ攻撃スルニ当リ 其配属工兵小隊ヲ以テスル鉄条網強行破壊ノ壮図空シク破レ 破壊筒ヲ鉄条網ニ押入シタル後点火スルコト不可能ナル状況ニ於テ 作江一等兵ハ北川、江下ノ両一等兵ト共ニ破壊筒ニ点火スルヤ之ヲ抱キテ敢然勇躍鉄条網ニ突入シ 遂ニ鉄条網ト共ニ粉碎セラレ 幅約十

米ノ突撃路ヲ開設シ 礎大隊ノ突撃ヲ容易ナラシメ 遂ニ堅壘廟巷ノ一角
ヲ占領スルヲ得シメタリ
以上 作江一等兵外二名ノ行動ハ実ニ崇高ナル軍人精神ノ精華ニシテ 壯
烈真ニ鬼神ヲ哭カシムルモノアリ 以テ全軍ノ龜鑑トスルニ足ル
依リテ茲ニ感状ヲ授与ス

ここには、三人の行動は「崇高ナル軍人精神ノ精華」であり、「壮烈真ニ鬼神ヲ哭カシムル」ゆえに、「全軍ノ龜鑑」とするという陸軍からの顕彰の言葉が、そのまま銅像の建立の由来に用いられている。

また台座正面の「肉弾三勇士」のレリーフの左隅には、「昭和九年六月西望作」と刻まれており、1933年（昭和8年）5月に久留米工兵第十八大隊に建立された「上海事変爆破勇士記念塔」の制作者である彫刻家北村西望が、このレリーフも手掛けたことが分かる⁽⁵²⁾。

ところが、かつてこの台座には、現在のものとは別の銅像が立ち、そこには「肉弾勇士北川伍長」と刻まれていた【図16】⁽⁵³⁾。すなわち、現在の銅像は戦後に再建されたものであり、「平和乃礎」の銘板も新たに刻まれたものである。では「平和乃礎」の「平和」とは、一体何を意味するのだろうか。そこでまず最初の銅像が建立されて撤去されるまでの経緯について見たい。

『佐々町郷土史』によれば、「新聞報道等により、三勇士の死が全国に伝わると国民が沸き立った。最初の記事には『忠烈の花と散った三勇士』としか書いていないが、誰が造語したのか『肉弾三勇士』と伝えられるようになった。全国各地の人々から遺族に対して、多額の浄財や書画類が送られて来たので、当時の村長久家竹一郎の配慮により、生家の宅地内に木造の北川伍長記念館を建て、遺品や記念品を保管することにした。佐々村を挙げた盛大な村葬には、廟巷鎮の戦闘の際に大隊長であった礎大佐や、

班長であった内田伍長も参列した。戦闘での負傷が全快せず、不自由な足を引きずって歩いている内田伍長の姿は痛々しかったという。(中略)その後各地で三勇士の銅像建立の話が起り、建設費の浄財も容易に集り、北川丞は佐々招魂場の忠魂碑の横に、作江伍長は平戸亀岡神社前の広場に建立された。両方とも完全武装した立像であり、佐々と平戸の名所になっていたが、太平洋戦争が深刻になるにつれて、物資の不足に悩んだ軍部は、全国の多くの銅像を軍需資材として強制的に取り立てた。その後は台座だけが空しく残っていた」⁽⁵⁴⁾。

「佐々村を挙げた盛大な村葬」とは、1932年(昭和7年)3月29日に佐々尋常高等小学校において執行されたもので⁽⁵⁵⁾、この2年後に最初の北川伍長の「完全武装した立像」が建立されたが、それは戦時中の金属供出によって失われたことが分かる。この銅像の供出は、北川伍長の甥の北川公氏から直接伺った話によれば、「再度の出征」とされるものであった。

これに関して、当時の新聞には「“いざ弾丸に、軍艦に”銅像・大挙して応召」という記事が掲載されており、この中には「三勇士」にまつわる「金属供出彩る感激話」が紹介されている⁽⁵⁶⁾。それは北川伍長の村葬に出席していた「三勇士」の班長であった内田徳次伍長が、後に浙江省大耳稱において戦死し、郷里の佐賀県に墓を兼ねて建立された「曹長事蹟銅碑」を巡って、母親が「大東亜戦争に参加できなかった我が子の身代りにと、去る五日同村における金属特別回収が行はれたとき、菩提寺真照寺内にある二男 徹^(マ)次曹長の墓地の鉄柵や曹長事蹟銅碑を供出しようと思ひ立ち、これを取外したがこの銅碑文を取外すと中にある遺骨が外から見えるので、これを同寺に移さうと、遺骨をしつかと抱いて同寺の階段を上りかけたとき、病弱と老衰からその場に卒倒、そのまま顔に微笑さえ浮べて息絶えたのであった『お前はこんどは弾丸となり兵器となつて大東亜戦争に応召で

きるのだ、喜んでおくれ……』と我が子に語るかのやうに」と記されたものであった。

この「美談」に対し「同村の人々は涙ぐましくも美しいうめさんの死に異常な感銘と深い感激に浸っている」と紹介されて、当時、戦死して国民の手本となった兵士の記念碑は、今度は金属供出の手本となるべく率先して供出に応じることが社会から期待されていたことが窺える。

では、三柱神社に立つ現在の北川伍長の銅像は、どのようにして建立されたのであろうか。「平和乃礎」台座の左側面には1968年（昭和43年）11月1日に「佐々町老人クラブ連合会明生会」によって、この新しい銅像の建立の由来が次のように刻まれている【図17】。

本町江里出身ノ肉弾三勇士北川丞工兵伍長ノ銅像ガ東京芝区青松寺ノ地下室ニ、二十余年間モ眠ツテイルコトヲ聞イテ本会ハ町内外各方面ノ協力ヲ得、明治百年事業ノ一ツトシテ之ヲ請受ケ、故郷ニ迎エテ元銅像ノ台座ニ建立シタ。我等明生会員ハ、明治大正昭和ノ三代ヲ生き抜キ、数次ノ事変戦役ヲ経テ遂ニ敗戦ニ遇イ廃墟カラ齒ヲ食イシバツテ立上ツテ来タ。

茲ニ伍長ノ殉国精神ヲ伝エテ我等ノ子孫ノ上ニ永遠ノ平和ガ来スルヨウ祈念シテ、平和ノ礎トスル。

ここには、この銅像がかつては東京の青松寺にあったものであり、それを「故郷ニ迎エテ元銅像ノ台座ニ建立シタ」ことが記されているが、北川伍長の銅像が、青松寺の地下室に「二十余年間モ眠ツテ」いたのは何ゆえであろうか。そこで次に青松寺の銅像が建立されてから撤去されるまでの経緯について見たい。

現在、東京の青松寺の墓地の一角に、三柱神社の北川伍長の銅像とよく似た一体の銅像が立っているが、これは北川伍長の銅像の後ろに続いていた江下伍長の銅像である。さらにその後ろに、消失した作江伍長の銅像も

続き、かつてこれは三人が一本の破壊筒を下げて走る姿の「肉弾三勇士」像であった【図18】。

この「肉弾三勇士」像を制作したのは彫刻家の新田藤太郎であり、青松寺に現存する「由来碑」には、1934年（昭和9年）2月22日に「肉弾三勇士銅像建設会 委員長医学博士 金杉英五郎」によって、次のように刻まれている【図19】。

忠孝ノ心ヲ存シ 仁義ノ事ヲ行ヒ 難至ツテ節見ハレ 累至ツテ行明カナ
ルハ 我大日本帝国臣民ノ伝統的精神ニシテ 其最モ善キ例ヲ示シタルハ
廟行鎮ノ役ニ挺身爆薬筒ヲ抱キ肉弾ト化シテ 瞬間ニ能ク敵前鉄条網ノ堅
陣ヲ爆破シ以テ皇軍進出ニ便ナラシメ 碎身奉公ノ誠ヲ致シタル 作江伊
之助 北川丞 江下武二 ノ三士ニシテ 其忠烈古今ニ絶シ其壮烈世界ヲ
震撼ス 真ニ所謂死シテ護国ノ鬼トナリ 永ク救国ノ訓ヲ揚ケタルモノト
謂フベシ 依テ茲ニ銅像ヲ建設シテ三士ノ遺骨ヲ其内ニ納メ 以テ忠魂ヲ
無窮ニ弔ヒ義烈ヲ万代ニ顕彰スル所以ナリ

この「肉弾三勇士銅像建設会」とは、1932（昭和7）年4月、貴族院議員で医学博士であった金杉英五郎を委員長に、発起人として近衛文麿、西郷従徳ら当時の社会の名士の賛助を得て発足したものであり、5月17日の発会式は「三勇士の分骨を迎へて」、「盛大に厳粛に」挙げられたとされる⁽⁵⁷⁾。

そして「由来碑」にも「銅像ヲ建設シテ三士ノ遺骨ヲ其内ニ納メ」と刻むように、金杉らが建立しようとした「肉弾三勇士」像は、単なる銅像ではなく墓碑としての性格を併せ持つものであり、それは「三勇士の分骨を台石の中央部に埋蔵して、銅像の意義を深からしめ」ようとするものであった⁽⁵⁸⁾。

また、同会が銅像建立に必要な経費を賄うために寄付を募った「肉弾三

「勇士銅像建設趣旨」には、以下のように記されている。

「廟行鎮の曉霧將に晴れんとす。久留米工兵大隊東島小隊所属当時一等兵たりし陸軍工兵伍長作江伊之助，同北川丞，同江下武二の三士，挺身爆薬筒を抱き肉弾と化して瞬間に能く敵前，鉄条網の固陣を爆破す。その忠烈古今に絶し，その壮烈世界を震撼す。惟ふに方今我が国の思想混濁し，人心浮動し，屢々国本を忘れ，大義を軽んず，内外幾多の憂患ここに醸成さる。此時に当り，三勇士が自若として必死の境に突入し，碎身奉公の誠を致したるは，単り鉄条網を爆破して国威を海外に顕揚したるに止まらず，実に我が国民思想を覆へる迷妄を粉碎し，国民をして日本精神の厳存を認識せしめ，進んで国難に処するの道を自得せしめたるものと謂ふべし。壮なる哉，死して護国の鬼となり，永く救国の訓を揚げたり矣。茲に於て不肖等微力をも顧みず大声疾呼して，全国の同胞各位の衷情に訴へその協心戮力に拠つて三勇士の銅像を建設し，以て同胞国民が感謝の赤誠を表すと共に，逝ける三勇士の気魄を生ける国民同胞に移して，益々日本精神を練磨し，因て以て国民精神を作興し，永く銷盡せしめざる事に努めんとす。希くば大方の諸賢この趣旨を諒とせられて奮て御賛同御後援を賜はらんことを」⁽⁵⁹⁾。

ここには、「三勇士」が「国民同胞」に身をもって示したのは「碎身奉公の誠」，「進んで国難に処するの道」，「救国の訓」といった「日本精神の厳存」であり，それゆえ「日本精神を練磨」し，「国民精神を作興」するために銅像の建立が必要であると訴えている。

こうして，全国，樺太，台湾，朝鮮，ペルーやダバオの日本人会等からも募金が集まって「肉弾三勇士」像は完成し，1934年（昭和9年）2月22日に除幕式を迎えた。この除幕式において金杉委員長が読み上げた式辞には，「三勇士」の「君命重きこと泰山の如く，一身軽きこと鴻毛の如きの

精神」を称え、「若し一朝事あつて世界一束と為りて来襲することあるも毫も恐ることなく、仮令若し一時的不利に遭ふことあるとしても日本帝国臣民の精神を奪ふことは到底出来るものではありません」と述べている。そして「斯の如き君国のために身を惜まざりし忠勇義烈の士を表彰せずには居られぬと感じたることが、銅像建設の企と為りたる次第」としながら、もし「一兵卒の為に銅像建設にも及ぶまいでは無いか」という者があれば、「純真無垢の青年兵卒の行為なるが為に特に表彰して之を一般国民の脳裏に注入せんとするものであり、且つ一般国民をして一将功なりて万卒枯る歎声無からしめんが為め」であることを訴え、最後に「我等をして最も感激せしめ、而かも目的の一半を達せしめたりと感ぜしめたるは全国二千数百の小学校児童十万人の寄付にして其金額は素より少きものなれども二世、三世の国民に肉弾三勇士の精神を欽慕せしむるの効果の少からざるものありたるを知る」と結んでいる⁽⁶⁰⁾。

さらに、この除幕式では、「愛宕高等小学校自治役員会」総代の少年が、「肉弾三勇士江下さん北川さん作江さんのあの廟行鎮の忠勇壮烈な行に我等日本人はどんなに感激し感謝したことでせう。軍神と仰ぎ学ぶべきこの三勇士の銅像が今度芝区内而かも私達の学校のすぐ近くの青松寺に建立され朝夕親しく偉容を仰ぐ事の出来る様になつた事は我等芝区民としての名誉でありこの上なき幸であります。就ては私共は朝夕三勇士の銅像に参詣し肉弾三勇士の其の忠義な心を学びながら清掃しようとして全校自治会員一同相談の結果毎早朝銅像前及び青松寺境内を清掃する事をお願いする事に決議いたしました。何卒此旨御聞入れ下さるようお願い致します」と申し出て、「満場に異常なる衝撃を与へた」とされ、金杉委員長も「感激に眼を湿うして『よく言ってくれた。その真心が現れるだけでも、この銅像を建設したことの目的の一半は達せられたのだ』」と述べている⁽⁶¹⁾。

また、銅像の建立後、「肉弾三勇士」像が社会に与えた影響について、『肉弾三勇士像建設会報告書』では、「銅像建設されてよりやがて二年、この間における銅像と民衆との関係を見るに、小学校児童の団体的に参拝すること多きのみならず、市内遊覧自動車は徐行して旅客に望観せしめ、個人的参観者就中慈母の子弟を率て恭く礼拝し、或は撮影するもの等、亦四時絶えざる状態を示し、この銅像の存在が社会人心に多大なる影響を及ぼしつつあるべきを想察せしむ」と記しており⁽⁶²⁾、「肉弾三勇士」像の青少年に対する教育的な意義が重視されていたと言える。

そして太平洋戦争開戦の翌年の1942年（昭和17年）、青松寺の「肉弾三勇士」像の写真は、『初等科国語二』の「三勇士」の文章と共に掲載された。そこでは「肉弾三勇士」像の写真に対して、次のように物語られている。

「北川が先頭に立ち、江下、作江が、これにつづいて走ってゐます。つづく二人も、それにつれてよろめきましたが、二人は、ぐっとふみこたへました。もちろん、三人のうち、だれ一人、破壊筒をはなしたものはありません。ただその間にも、無心の火は、火なはを伝はって、ずんずんもえて行きました。北川は、決死の勇気をふるって、すくと立ちあがりました。江下、作江は、北川をはげますやうに、破壊筒に力を入れて、進めとばかり、あとから押して行きました。三人の心は、持った一本の破壊筒を通じて、一つになってゐました。しかも、数秒ののちには、その破壊筒が、恐しい勢で爆発するのです。もう、死も生もありませんでした。三人は、一つの爆弾となって、まっしぐらに突進しました」。そして爆音がとどろき渡って歩兵が突撃に移り、「班長も、部下を指図しながら進みました。そこに、作江が倒れてゐました。『作江、よくやったな。いひ残すことはないか。』作江は答へました。『何もありません。成功しましたか。』班長は、

撃ち破られた鉄条網の方へ、作江を向かせながら、『そら、大隊は、おまへたちの破ったところから、突撃して行ってゐるぞ。』とさげびました。『天皇陛下万歳。』作江はかういって、静かに目をつぶりました⁽⁶³⁾。

このように教科書にも大きく掲載され、戦意高揚に貢献する青松寺の「肉弾三勇士」像は、戦時中の供出によって失われることはなかったが、敗戦後、教科書の「三勇士」は「戦意昂揚ニ関スル教材」として「墨ぬり」が行なわれ⁽⁶⁴⁾、「肉弾三勇士」像もまた撤去されて公衆の面前から姿を消した⁽⁶⁵⁾。現在、青松寺の江下伍長の銅像には両足首から下がなく、また三柱神社の北川伍長の銅像も左膝から下が失われて補修されていることから、「肉弾三勇士」像は台座から打ち倒されるようにして撤去され、三体に分断されたと推定される。

それは、もはや敗戦後の社会にとって「肉弾三勇士」の記憶や、国を挙げて彼らを顕彰した記憶が「不要」となったことを象徴し、存在意義を失った北川伍長の銅像は他の銅像と共に「青松寺ノ地下室ニ、二十余年間モ眠ツテイル」状態となったと言える。

この青松寺の地下室で眠っていた北川伍長の銅像が、再び日の目を見ることになったのは、北川公氏によれば、北川氏が昭和40年代の始めに新聞か画報によって東京に銅像が存在することを知り、当時の町長に掛け合っ て佐々町への「里帰り運動」が始まったことがきっかけとされる。また、由来に刻まれている「明治百年事業ノーツ」と認められたことが、銅像建立の追い風となり、建立のための資金的な援助が得られたと考えられる。こうして、敗戦後に台座から引き倒された青松寺の銅像が、戦時中の供出により銅像を失った佐々町の台座と合体した。

現在、三柱神社には、「平和乃礎」と共に「明治百年」に際して1968年（昭和43年）11月に建立された「殉国者の塔」と「従軍之碑」があるが、

老人クラブの明生会の会員が「平和乃礎」に「明治大正昭和ノ三代ヲ生き抜キ、数次ノ事変戦役ヲ経テ遂ニ敗戦ニ遇イ廢墟カラ齒ヲ食イシバツテ立上ツテ来タ」と刻んだように、「従軍之碑」には「コノ碑ニ芳名ヲ録サレタ諸氏ハ誠ニ苦難ノ道ヲ辿リ乍ラ幸ニ九死ニ一生ヲ得テ郷里ニ帰還サレマシタ」と刻まれている【図20】。戦後23年を経て経済的な発展を遂げ、従軍体験者に対する慰労と戦没者の顕彰を公的な場に次々と実現させた時代背景の下に、北川伍長もまた「名誉回復」のシンボルとして脚光を浴び、再顕彰されたと言えよう。同時にそれは、敗戦後の社会において手のひらを返すように「三勇士」の記憶が忘却されたことに対する、地域社会からの異議申し立てであったのかもしれない。

いずれにせよ、再度の北川伍長の記念に際し、それを意味付けるために必要とされた言葉が「平和」であった。かつては「君国のために一身を鴻毛よりも軽んずる」ことを体現して「皇国の犠牲」となるとされていた北川伍長は⁽⁶⁶⁾、「平和乃礎」に「伍長ノ殉国精神ヲ伝エテ我等ノ子孫ノ上ニ永遠ノ平和ガ来スルヨウ祈念」と刻まれ、「平和」を招来するために「犠牲」となると読み替えられている。

すなわち「平和乃礎」の「平和」とは、「国家に忠義を尽くして倒れた者たちの犠牲の上に戦後日本の平和と繁栄がある」⁽⁶⁷⁾という論理に拠るものであって、それは単に生命を大切にするという意味ではなく、反対に生命を投げうつに値する「大義」であり、必ずしも「戦争」を否定するものではないと、言えるのではないだろうか。

(2) 香川県仲多度郡多度津町桃陵公園の「一太郎やあい」

香川県仲多度郡多度津町の桃陵公園は、小高い丘の上に位置する県立公園であり、その展望台に「一太郎やあい」と刻まれた、眼下の港に向かって手を振る老婆の像が立っている【図21】。

この「一太郎やあい」とは、1904年（明治37年）8月28日、日露戦争に際して多度津港より船で出征する一人息子を見送った老母の物語で、その健気な姿に感動した目撃者の話によって「軍国の母」の「出征美談」として広まり、1921年（大正10年）には教科書にも掲載されるなど国民的な人気を博した後、同年10月にそのモデルとなった岡田かめ・梶太郎の親子がを見つけ出されて、社会から盛んに顕彰されたものである。

そして「一太郎やあい」の銅像の台座には、建立者名も建立年月日も一切記さず、ただ次のように由来が刻まれている【図22】。

前銅像ハ大東亜戦酣ナル時金属回収ニ供出セリ 此ノ像一太郎ヤァイハ真ノ母性愛ヲ表徴セルモノニシテ 永遠ノ平和ヲ記念センガ為 再調シタルモノナリ

ここには、以前の銅像は供出によって失われてしまったので、この「真ノ母性愛」を表す「一太郎ヤァイ」像を、「永遠ノ平和ヲ記念」して「再調」したと刻まれているが、台座の背面は碑文が削り取られたままの状態であり、何ら修復されていない【図23】。これは一体何を意味するのであろうか。そこでまず「前銅像」について検証したい。

『多度津町誌』によると、「前銅像」は「肉弾三勇士」像の作者でもある、香川県出身の彫刻家新田藤太郎が制作したもので、銅像の建立は今井浩三多度津町長によって桃陵公園の造営と並行して計画され、1931年（昭和6年）6月21日に銅像の除幕式が行なわれた。除幕式は岡田かめ・岡田

梶太郎親子，香川県知事，善通寺第十一師団長，地元関係者のほか，大阪市からの小学生なども参加した，盛大なものであった。そして銅像の前には展望台レストランが設けられ，園内には子どもの遊園地や運動場も造られて多度津町が誇る名所となった⁽⁶⁸⁾。

また，多度津町在住の氏家睦夫氏によると，「前銅像」は全国小学児童より寄せられた寄付によって制作されたのに対し，銅像台座は多度津町の寄付で建てられ，台座の表面には一戸陸軍大将揮毫の「奉公記念標」の五字を，背面には高松明善高女校長山川波次氏揮毫の『尋常小学国語読本』巻七第十三の「一太郎やあい」の本文を，銅板にして挿入したとされる⁽⁶⁹⁾。

すなわち，銅像の台座背面から削り取られたのは，第三期の国定教科書『尋常小学国語読本』に掲載された「一太郎やあい」の本文であり，それは次のような文章であった。

日露戦争当時のことである。軍人をのせた御用船が今しも港を出ようとした其の時，

「ごめんなさい。ごめんなさい。」

といひいひ，見送人をおし分けて，前へ出るおばあさんがある。年は六十四五でもあらうか，腰に小さなふろしきづつみを結びつけてゐる。御用船を見つけると，

「一太郎やあい。其の船に乗つてゐるなら，鉄砲を上げろ。」

とさげんだ。すると甲板の上で鉄砲を上げた者がある。おばあさんは又さげんだ。

「うちのことはしんぱいするな。天子様によく御ほうこうするだよ。わかったらもう一度鉄砲を上げろ。」

すると，又鉄砲を上げたのがかすかに見えた。おばあさんは「やれやれ。」といつて，其所へすわつた。聞けば今朝から五里の山道を，わらちがけで

急いで来たのださうだ。郡長をはじめ、見送の人々はみんな泣いたといふことである。

この中で特に、一太郎の母が「うちのことはしんぱいするな。天子様によく御ほうこうするだよ」と叫んだことが重視されたゆえに、「前銅像」は「一太郎やあい」ではなく「奉公記念標」と名付けられたと考えられる。当時の絵葉書を見ても台座正面に「奉公記念標」の文字と、その上に軍隊の星のマークが確認でき、まさにそれは「軍国」に対する「奉公」を表していたと言えよう【図24】。

では、実際に岡田かめ・梶太郎親子は、当時の社会からどのように顕彰されたのであろうか。桃陵公園には1936年(昭和11年)建立と刻まれた「奉公記念碑」が現存するが、そこには「奉公記念標」が建立されるまでの親子に対する「礼讃」を、次のように刻んでいる【図25】。

明治三十七八年戦役ハ皇国興廢ノ岐ルル所ニシテ 殉難奉公ノ気概国内ニ横溢セリ 当時旅順攻囲ニ参加セル丸亀連隊ノ出征御用船ノ当港解纜ニ際シ 埠頭ニ馳ケツケタル一老婆 一太郎ヤアイ鉄砲ヲアゲロ 家ノ事ハ心配スルナ 天子様ニ克ク御奉公スルダヨト 叫ンテ其愛子ヲ激励シタル事実ハ 全国民ノ意気ヲ鼓舞シ 出征美談トシテ国定教科書ニ載録セラレタリ 此ノ母子コソハ本県三豊郡豊田村岡田かめ女ト其一子梶太郎ナレト 一度大阪朝日新聞ニ報セラルルヤ 忠愛ノ情ニ燃ユル我國民性ハ翕然トシテ母子ノ礼讃トナリ 演劇ニ映画ニ浪曲ニ琵琶歌講談等ニ依ツテ精神教化ノ資ニ供セラル 大正十一年本県ニ於ケル特別大演習ニ際シテハ 畏クモ高貴ノ御馬前ニ謁ヲ賜ヒ 更ニ昭和六年宮城参殿ヲ許サルル等幾多ノ光榮ニ浴セルノミナラス 日本婦人ノ典型トシテ海内ニ喧伝歎美セラルルニ至レリ 斯ノ如ク有事ニ際シテ欣然最高ノ犠牲ヲ君国ニ捧クル報國ノ精神ハ 平時ニ在ツテ更ニ讃仰スヘク 之ヲ永久ニ顕揚センカ爲メ 全国小学校児

童及篤志家ノ贊助ニ依リ 縁故深キ此地ニ教科書ノ全文ヲ掲クルト共ニ其ノ姿影ヲ鑄造シ 奉公記念標トシテ建設シタルモノナリ 小野高介撰
白川大吉書

この碑は岡田かめ・岡田梶太郎が暮らす、三豊郡豊田村（現・観音寺市）の小野高介村長によって碑文が刻まれており、ここには「有事ニ際シテ欣然最高ノ犠牲ヲ君国ニ捧クル報国ノ精神」、すなわち大切な一人息子を「犠牲」として「君国」に捧げたことが「讃仰」され顕彰されて「奉公記念標」が建立されたと刻まれている。

また、「大正十一年本県ニ於ケル特別大演習ニ際シテハ畏クモ高貴ノ御馬前ニ謁ヲ賜ヒ」とは、教科書に「一太郎やあい」が掲載された翌年の1922年（大正11年）11月18日に、親子が香川県で開催された陸軍大演習に臨席していた皇太子（後の昭和天皇）に拝謁が許され、皇太子から「からだを達者にせよ」との言葉をかけられたことを指し⁽⁷⁰⁾、「更ニ昭和六年宮城参殿ヲ許サルル等幾多ノ光栄ニ浴セル」とは、「奉公記念標」が建立された1931年（昭和6年）の11月2日に、宮中への参内と昭和天皇への拝謁が許されたことを指して⁽⁷¹⁾、「奉公」が「君国」により認められて報われたことも併せて記念されている。

1934年（昭和9年）に死去した岡田かめが葬られている心光院（観音寺市池之尻町）の墓碑にも、「大姉カ純忠報国ノ一念ヲ以テ出征ノ一子ヲ激励セル叫声ハ国民ノ意気ヲ鼓舞セシ事九重ニ達シ」と刻まれ、「雲井まで届きし雁の叫びかな」の句が添えられており、当時の社会において二度もの謁見を許されたという「光栄」の「奉公」の記憶が、如何に称讃に値すべき大きな意味を持っていたかが分かる。

しかし、太平洋戦争の開始によって、「前銅像」は1942年（昭和17年）の金属回収で供出されてしまった。にもかかわらず、知名度の高さゆえで

あったのだろうか、あるいは「奉公記念標」と刻まれた立派な台座に銅像が不在のままでは士気の低下を招くと考えられたのだろうか、早くも翌1943年（昭和18年）にはコンクリート像として再建されている⁽⁷²⁾。

敗戦後、このコンクリート像は撤去されなかったが、台座背面の教科書を刻んだ銅板と、台座正面の「奉公記念標」の銘板、そして星のマークは撤去されており⁽⁷³⁾、かろうじて再建した像だけは存続を許されたことが分かる。戦時下の教科書では「一太郎やあい」は既に掲載されていなかったもので、実際に教科書の文章に墨が塗られることはなかったが、台座に刻まれた教科書の碑文は、「墨塗り」の対象となる「戦意昂揚ニ関スル教材」と見なされ削除されたと考えられる。

それでは台座に刻まれた「再調」された「一太郎やあい」像とは、何であろうか。一見「再調」とは像自体の再建を指すように思えるが、コンクリート像の再建は既に敗戦以前に行なわれている。それゆえ「再調」とは、碑銘を失い名無しの状態であった像の台座に、新たに「一太郎やあい」の銘を刻んで像を名付け、再記念して物語ることができるようにしたことを指すと考えられよう。その再度の記念を意味付ける言葉が「真ノ母性愛」であり、「永遠ノ平和」であった。

それは一体どのような背景の下で行なわれたのであろうか。先述したように、由来には誰がいつ「再調」したかは一切刻まれておらず、当事者による記録も管見によれば存在しない。ただ当時の新聞に僅かな手掛かりがあるのみである。その新聞とは、「明治百年」に当たる1968年（昭和43年）に「百年の火」と題する記事を連載した『サンケイ新聞』の香川版であり、連載の第28回から第37回まで（2月21日～3月9日）「栄光の記録——一太郎やあい」の特集が組まれている。

その中では「一太郎やあい」は「“死んでも、口からラッパをはなしま

せんでした…”の木口小平」や「廟江鎮で散った江下，北川，作江の肉弾三勇士」と共に「忘れられない物語」と紹介され，「明治百年を通じて，教科書にのった人物は，県下では，この親子だけ」と称えた上で，「標題と内容を，母と子の愛情，祖国愛にしぼって焼き直せば，現代でも，りっぱに通用する道徳教育の実話教材である」とする⁽⁷⁴⁾。そして「ことしは明治百年。かつて『軍国の母』，『出征美談』，『忠孝美談』など，いろんな名称で呼ばれ，賛美された『一太郎やあい』も，やっと軍国調から抜け出し，現代調の『祖国愛と母子の愛情』から，クローズアップされようとしている。すでに，桃陵公園の『一太郎やあい』の像も，軍国の母としてではなく，一人息子を出征させた『母性愛のシンボル』に生まれかわった。多度津町にとっても，明治，大正，昭和の三代の女性に共通する母性愛の生きた観光資源となっている」とされ「瀬戸の寒風に身をさらしながら，かめ女さんは，きょうも右手を高く上げ，わが子の名を呼びつづけている。今もむかしも，人類不滅の母性愛のシンボルとして—」と記されている⁽⁷⁵⁾。

ここからは，「明治百年」に際して，「一太郎やあい」が「現代調」に焼き直されて「祖国愛と母子の愛情」の物語として再評価され，桃陵公園の「一太郎やあい」の像が「母性愛のシンボル」として「生まれかわった」ことが分かる。また同時に，多度津観光のシンボルとしても期待が寄せられており，桃陵公園に戦前の賑わいを取り戻そうとする町の思惑があったことも窺わせている。

そして「明治百年」以降，「母性愛のシンボル」となった「一太郎やあい」像は，『多度津町誌』に「母性愛の像として海に向かって手を挙げている」と紹介されるなど⁽⁷⁶⁾，新たな記憶の定着化が進み，1978年（昭和53年）に多度津町在住の米田明三氏が著した「一太郎ヤーイ余聞」の中では，「一太郎やあい」像は最初から「母性愛の象徴」であったとする，元

多度津町助役の山崎雄一氏が米田氏に語ったエピソードを、「町民にも是非知ってもらいたい」として次のように紹介している。

「終戦直後のこと進駐軍が役場へ来て“銅像撤去の命令”を受けたが町長が留守だったので助役の儂が交渉にあたった。『母親と若い一人息子の二人暮らし。かけがいのない頼りにしている一人息子と別れねばならぬ。お国の為とは申しながら母親は耐え切れぬ一念で二十八キロの道を夜を徹して最後となるかも知れぬ別れに三豊郡豊田村から鳥坂を越え丸亀連隊にたどり着き更に多度津港まで来たのです。一寸持たしてやりたい買物（氷砂糖）をしている僅な時間に舢舨に乗った息子は引き船に曳航されて港を出たのです。母親は泣声を力一ぱい出して吾が子の名を呼びました。其の声が届いて息子は鉄砲を上げて応えたのです。それを見た母は両手を高く上げ左右に振りながら見えなくなるまで涙を流しその場を動こうとはしませんでした。それは全く母と子との自らなる自然の情であるからこの銅像は“母性愛の象徴”として永久に保存させてもらいたいんです』と儂は誠意をこめて話したら進駐軍将校は“フーム”と頷いてそのまま認めてくれたんだぞ」⁽⁷⁷⁾。

この回想の中では、進駐軍に対し「この銅像は“母性愛の象徴”として永久に保存させてもらいたい」と言ったことが「そのまま認めてくれた」とされているが、敗戦後、台座から教科書を刻んだ銅板と「奉公記念標」の銘板、そして星のマークが撤去されたことに関しては、何ら触れていない。

また米田氏は、1943年（昭和18年）に再建されたコンクリート像の制作者の「母性愛像を造った神原益太郎君」が米田氏に対し、「完成後県庁から立会いに来て『これなれば千年でも二千年でも大丈夫だ』と言われ“母性愛の象徴”として神原益太郎作と登録されている」と語ったことを併せて

紹介し⁽⁷⁸⁾、「母性愛の象徴」としての「一太郎やあい」像を強調している。

確かに教科書に掲載された「一太郎やあい」の物語から、子を思う母の気持ち、子の無事を祈る母の姿を読み取ることは可能であり、それは「一太郎やあい」と共に教科書に掲載された「水兵の母」が、手紙で息子に「何のために軍には出で候ぞ。一命を捨てて、君の御恩に報ゆるためには候はずや」と叱咤激励して示した勇ましさとは対照的である⁽⁷⁹⁾。この違いゆえに「水兵の母」は敗戦まで教科書に掲載され続け、反対に「一太郎やあい」は改訂後の教科書から姿を消してしまったと言えよう。

しかし、「軍国の母」ではなく「母性愛のシンボル」と読み替えられても、「有事ニ際シテ欣然最高ノ犠牲ヲ君国ニ捧クル報国ノ精神」が否定されたわけではないことに注意する必要がある。『産経新聞』にも「祖国愛と母子の愛情」と併記されたように、ここで用いられる「母性愛」は「祖国愛」と矛盾するものではなく、また「祖国愛」は「報国ノ精神」と大差がない。にもかかわらず、「一太郎やあい」像を「再調」して「永遠ノ平和ヲ祈念」することが、何ゆえ可能であったのだろうか。

それを探る手掛かりとして、1968年（昭和43年）に香川県の「明治百年を祝う県の多彩な事業」を県民に向かって広報した、青少年育成香川県民会議発行の機関紙『若い香川』を見たい。この巻頭には「明治百年を祝う」と題して、「政府刊行 時の動き」より次のような文章が引用されて掲げられている。

「この百年間、わが国民には、世界を鼓舞した壮挙もあれば、顧みてただすべき過ちもないとはいえなかった。しかしながら、この時期に先人の築き上げた基盤が政治、経済、文化、その他すべての面にわたってどのように偉大で強固なものであったか。それは、このたびの大戦禍にもかかわらず世界の奇跡と驚嘆されるまでに急速に復興し繁栄している日本の現状

が、なにより雄弁に物語っている。われらはこの先人の勇気と聡明と努力とに対し、敬意と称賛の念を禁じ得ない。いま明治百年を迎えるにあたり、日本国民が先人から受けたこの恩恵に感謝し、その幸せをいっそう大きくして次の時代に引継ごうと願うのは、まことに自然の道である。もちろん、この願いは、たんに先人を礼賛し記念することで終わるものではない。(中略)われらは、過去の事績を顧みるにとどまらず、その遺産である経験と教訓とを現代に生かし、国際的視野のもとに新世紀への歩みを正しくかつ確固としたものとする決意を明らかにしなければならない。われら日本国民は、将来への限りない希望をこめて、明治百年を記念し、これを祝うのである」⁽⁸⁰⁾。

さらに同紙の「編集後記」では、「世の大人たちは、明治百年間をすべての面で大いに意義あるものと考え、とくに、このときにおいて若きものにふるきをたずね新しきを知らしめることにより青少年の物心両面における健全な育成を願っている」にもかかわらず、「現代の青年の心の面における感覚なり観念は大人の観念とは大人の感覚とは全く違った位置に所在している」とし、それは「将来の日本を背負って立つ青年が、日清、日露、さらには、太平洋戦争を知らず、たとえ知っていたとしても『好戦国日本の侵略戦争であって世界に恥ずべき歴史』という認識」を持っていることであると。そして、「日本の青年が、日本の国史とくに明治以降の国史に未知なことや戦争に対する認識をこのようにもっていることは、究極するところ現代の教育に問題があったとみるべきではないか」と批判して、「このような青少年の状態であるからこそ、巻頭にある『明治百年』観念の高揚が必要であり、それがためには明治百年の歴史を十分に知らねばならない」と記している⁽⁸¹⁾。

ここには、「明治百年」に際して先人を称えて記念するのは、先人が「世

界の奇跡と驚嘆されるまでに急速に復興し繁栄している日本の現状」の基盤を築いてくれたおかげであり、「日本国民が先人から受けたこの恩恵に感謝し、その幸せをいっそう大きくして次の時代に引継ごうと願う」ことであるとしている。また、それは日本の繁栄の礎として「明治百年」の戦争を意義あるものへと読み替えることすら厭わず、まさに「東京オリンピックの成功とその後の経済成長は、現在の日本の繁栄に戦争は役に立ったのだという予定調和的な歴史観」⁽⁸²⁾に支えられたものであった。

このような「『明治百年』観念」に則って、日露戦争の意義が見直され、「一太郎やあい」像が「再調」されたとするならば、そこに刻まれた「平和」とは、「復興し繁栄している日本の現状」に等しく、また「平和」を祈念するとは「日本国民が先人から受けたこの恩恵に感謝」することに他ならない。すなわち、ここでも「平和」は「戦争」の全否定ではなく、反対に繁栄の礎として「戦争」を肯定していると、言えるのではないだろうか。

4. 変容する記憶と歴史教育

本稿で取り上げた四つの「平和のかたち」では、いずれも記憶の読み替えが見られたが、このような変容を遂げる「戦争と平和」の記憶に対し、歴史教育において、どのようなスタンスを取ればよいのであろうか。まず各地の「平和のかたち」に対する教員や団体の姿勢について見たい。

広島「平和塔」に対しては、地元の中学教員の空辰夫氏が、「凱旋碑が平和碑になり得るか」と訴え、「軍国主義・軍港宇品のシンボル、五十年の歴史をもつ凱旋碑が、誰の仕業か不明のまま平和の塔として残されていますが、その素質があるのでしょうか。いまこそ過去に果たしてきた役割をきちんと説明し、侵略史を反省する責任ある凱旋碑にかえすべきだと思います」と発言している⁽⁸³⁾。

また、宮崎の「『平和の塔』の史実を考える会」も、「八紘基柱」の礎石が日本の軍隊が略奪したものであったことを問題とし、「加害責任の記念物」として「負の過去」を伝え、「八紘基柱」を「真に平和を誓う場」にする必要性を訴えている⁽⁸⁴⁾。

さらに、香川県の高教員石井雍大氏も、「一太郎やあい」を「母子の愛情、祖国愛にしばって焼き直せば、現代でも、立派に通用する道徳教育の実物教材」とすることを問題視して、「『一太郎やあい』の故事が素朴な『母子の愛情』という形をとって再び息をふきかえず危険性がある」とし、「私たちは二度と再び可愛い教え子を戦場に送ったり、女生徒を『軍国の妻』や『軍国の母』にしてはいけない」と述べている⁽⁸⁵⁾。

このように、三者とも各々の「平和のかたち」は「偽りの平和」や「偽りの愛情」を表すものとして糾弾し、建立時に溯って加害責任・戦争責任を考える教材にしようとする姿勢が共通し、「負の過去」を学ぶことに重

点が置かれている。

私は、記念物から都合よく碑文を削除して歴史を隠蔽するような歴史修正主義には組しないが、各地で見られた「平和のかたち」への変身を、単に「悪」として切って捨てるのではなく、その意味について十分に考え、記憶の変容をもたらした戦後の社会に焦点を当てて学習する必要があると考える。

好むと好まざるとに関わらず、記憶とは変容する性質を帯びるものではないだろうか。記念・顕彰行為（コメモレイション）を研究する小関隆氏が、「記憶とは過去の出来事の単なる貯蔵としてではなく、現在の状況に合わせて特定の出来事を想起し意味を与える行為」であって、「個人や集団のアイデンティティが固定されたものではなく、不断に変容を遂げることに対応して、記憶も絶え間なくつくり直されていく。また、『記憶に値する』と認定された何かが呼び起こされる一方では、そうでないものが排除され隠蔽される。この意味で、忘却は記憶の構成部分である」と唱えるように⁽⁸⁶⁾、「絶え間なくつくり直されていく」記憶の社会的な背景を見据えない限り、現在の社会にとって不都合な記憶の忘却に、何ら抗する力とはなり得ないのではないだろうか。

実際、1948年の「忠霊塔忠魂碑銅像等撤去状況」を見ると⁽⁸⁷⁾、「軍国主義又は超国家主義的思想の宣伝鼓舞を目的とする」と見なされた全国7411基の忠霊塔忠魂碑等のうち、目立たぬ場所へ移転された890基と「模様替」した908基の合計1798基（24％）は撤去を免れており、また銅像も400体のうち、46体（11％）が撤去されていない【表1】。このように敗戦後の社会において、本稿で見た四つの事例と同様の現象が日本中で見られ、夥しい数の記念物が「模様替」や移転という方法によって、記念物の「過去」を伏せる「かたち」で存続を許されている。

【表1】 「忠霊塔忠魂碑銅像等撤去状況」 (1948年5月1日)

	除去・破壊	移 転	模 様 替	合 計
忠魂塔・ 忠魂碑等	5,613基 (76%)	890基 (12%)	908基 (12%)	7,411基 (100%)
銅 像	354体 (89%)	17体 (4%)	29体 (7%)	400体 (100%)

そして、それは敗戦当時の日本人が記念碑や銅像に対して、極めて流動的な見方をしていたことを反映した「かたち」であった。敗戦後にGHQが軍国主義的な記念物の撤去に関して、日本の知識人28人に対して行なった聞き取り調査によれば⁽⁸⁸⁾、「人々の心に記念碑は何を表しているのか」という質問に対し、回答の多い順から「ほとんど、もしくは全く意味がない」、「時により意味が変わる」、「無回答」がそれぞれ5人、「軍国主義的思想を表す」が4人、「非軍国主義的意味」が3人、「国家愛」が2人等となっている。また、「記念碑を移動するべきか」という質問に対しては、24人が「イエス」と答え、さらに「移動はどんな効果を与えると思うか」という質問に対し、多い順に「あまり反応はない」が8人、「良い効果や反応」が5人、「悪い反応はない」と「適切に替えられるのであれば問題ない」がそれぞれ3人、「悪い」と「様々な反応」がそれぞれ2人等となっている。このように、当時の知識人の間では、記念物は「時により意味が変わる」ものであり、「適切に替えられるのであれば問題ない」と見なす者が少なくなかったのである。

こうした調査結果をもとに、GHQは「戦争記念碑の意味は日本人にとって大きくないが、記念碑によって異なり、時代の政治的雰囲気との関係

で解釈される（軍国時代なら軍国的解釈）。記念碑は移動させるべきであるが、全てではない。選択に十分な配慮が必要で、明白な軍の記念碑は移すべきだが他は残すべき。移動した空白を平和的シンボルで埋めるべき。移動させる主体については意見が一致しない。占領軍による行動が最も望ましくなく、日本人自身で行なうべきという傾向がむしろ強い」と結論付け、それが政策にも反映されて「軍国主義又は超国家主義的思想の宣伝鼓舞を目的とするもの」の撤去は不徹底に終わっている⁽⁸⁹⁾。

結局、敗戦を経ても過去の記念・顕彰行為に対する十分な反省は見られず、軍国主義を鼓舞した記念碑や銅像は再解釈の余地を与えられ、「聖戦」に替わる新たな時代の「大義」となった「平和」を祈念するものへと読み替えられていったと言える。

しかし、戦後の日本で盛んに記念された「平和」とは、その時々によって様々な意味合いを持ったものであった。占領下の広島では進駐軍の意向を反映して、原爆投下を肯定する「平和」が記念されたが、独立後はそれが打ち消され、宮崎でも建立時とは正反対の意味の「平和」が記念された。そして長崎と香川では高度経済成長期の、経済的繁栄とナショナリズムの高揚を反映して、戦争の犠牲者を再顕彰し、「明治百年」の戦争をも意義付ける「平和」が記念された。それは「平和」もまた、「時代の政治的雰囲気との関係で解釈される」ものであったことを意味する。

「平和」が多用され自明視される社会にあって、こうした様々な解釈を可能とする「平和」概念そのものを問わない限り、「偽りの平和」であるとして「平和のかたち」を批判することは不可能ではないだろうか。「平和」とは多分に政治的に用いられる概念であることを銘記する必要がある。

そして、歴史教育において問うべきは、戦時下の記憶や占領下の記憶が、「平和」の名の下に封印・削除され、忘却に委ねられていく状況である。

そこから「墨塗り」に対する無感覚、「過去を直視せず封印する態度」⁽⁹⁰⁾が育まれてしまう。

では、不都合な記憶の忘却に抗するには、どのような学習が必要であろうか。アメリカの歴史学者パトリック・H・ハットン⁽⁹¹⁾は、フランスの社会学者アルヴァックスが唱えた「集合的記憶」論⁽⁹¹⁾を用いて、「アルヴァックスは、集合的記憶が持続する力は、それを指示する集団の社会的力に左右されると主張した。回想するときわれわれが取り戻す過去のイメージは、それをもともと知覚したときとは異なり、むしろわれわれの現在の考え方に適合したものとなるのだが、これを作り上げているのはわれわれに働きかける社会的力である。ということで集合的記憶が目立つものなら、それはある特定の集団の社会的役割の反映であり、したがって社会的表象の現象学的研究は、社会史の重要な文化的見通しを与えてくれるのである」と述べるが⁽⁹²⁾、まず記念碑等の「かたち」に表象された記憶を「集合的記憶」として位置付け、それを手掛かりとしながら記念・顕彰行為を行なった社会について学ぶ、社会史の学習が必要である。そしてその「かたち」から記憶の重層性を読み解き、忘却された記憶と新たに読み替えられた記憶の双方を明らかにして対比することで、記念・顕彰行為の意味を考えることが重要ではないだろうか。

それは、テッサ・モーリス＝スズキが「記憶と記念行為をさらにより深く再考すること、そして記憶と記念が未来の創造に果たす役割を根底から考え直すこと」の必要性を唱えるように⁽⁹³⁾、記念碑に刻まれる「大義」を鵜呑みにせず、それが時代の変化と共に読み替えられていくこと、また同時に過去の「大義」が忘却されてしまうこと等、記念碑を批判的に読み解くことを通して歴史リテラシーを育成する学習に他ならない⁽⁹⁴⁾。

また、単に忘却される記憶を忘れないためだけではなく、「われわれがい

とも簡単に忘れることを忘れないため」⁽⁹⁵⁾にも、「平和のかたち」をもとにした「集合的記憶」の社会史的な学習が必要であると考えます。

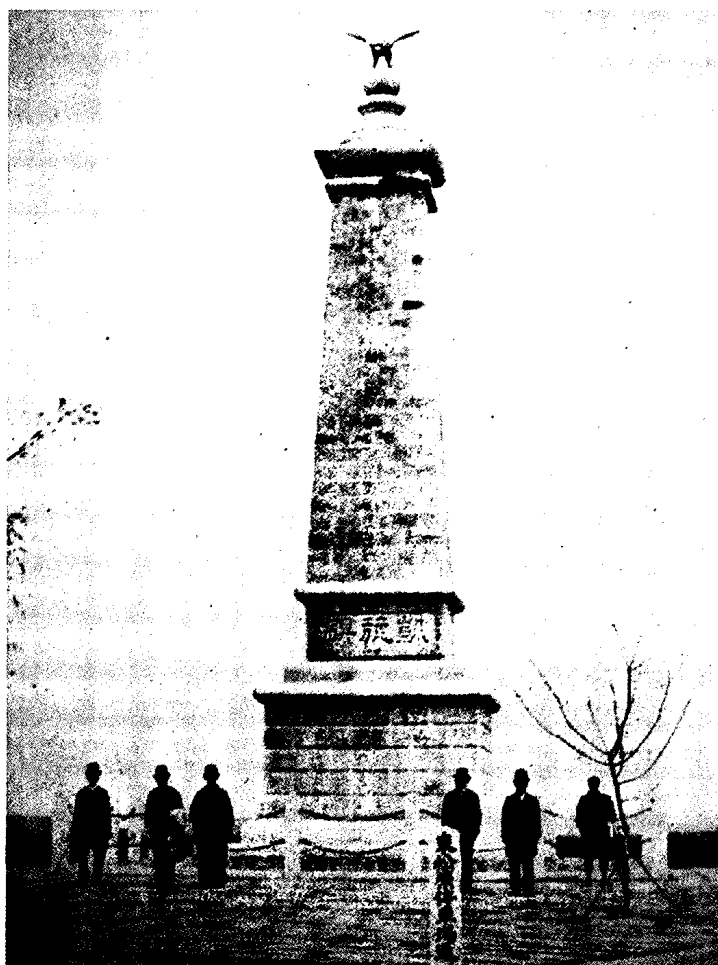
本稿では、具体的な授業を提示するまでには至らなかったが、これから実際に授業を開発して実践し、その学習効果を検証すると共に、改めて「平和」概念そのものについて再考することを、今後の課題としたい。



【図1】 広島県広島市南区皆実町緑地の「平和塔」



【図2】 塔の台座背面



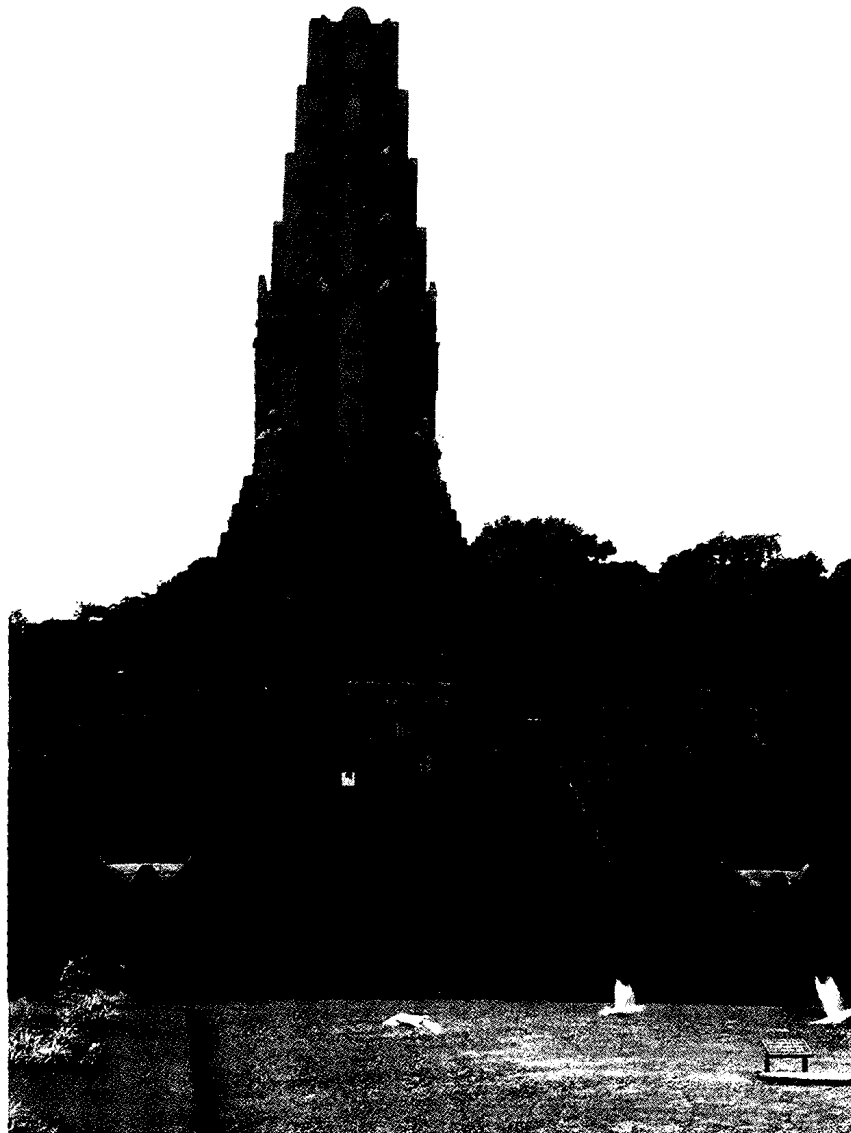
【図3】 建立当時の「凱旋碑」



【図4】 塔頂上の鳥（「復元」前）



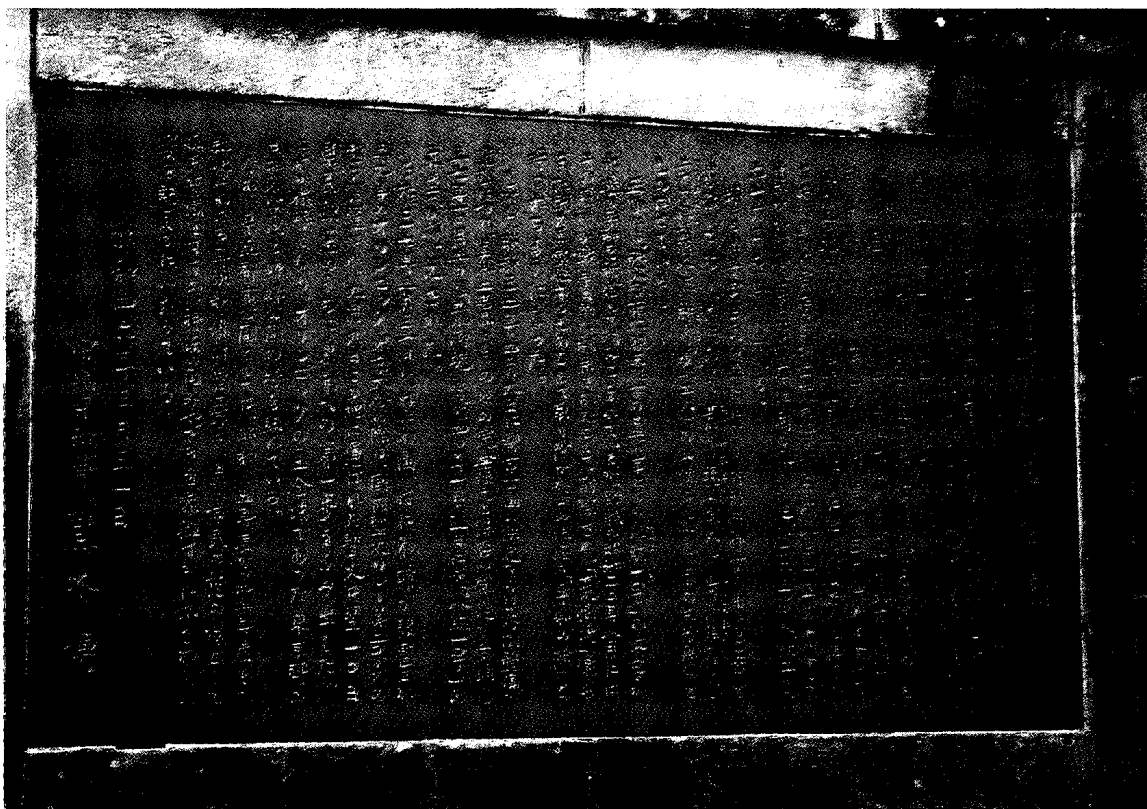
【図5】 塔頂上の鳥（「復元」後）



【図6】 宮崎県宮崎市平和台公園の「平和の塔」



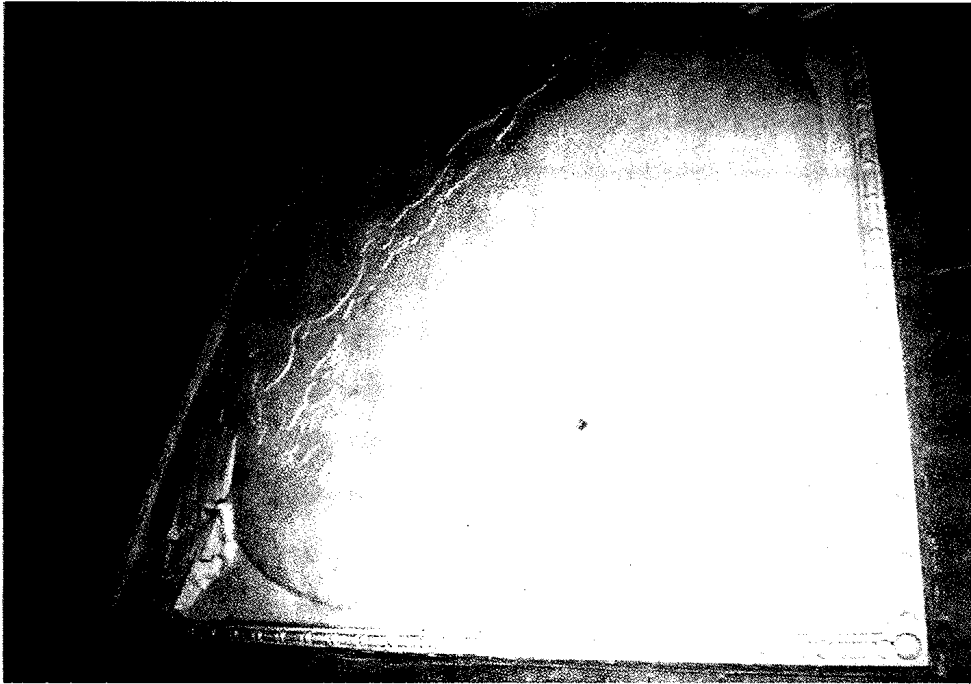
【図7】 十銭紙幣に描かれた「八紘之基柱」



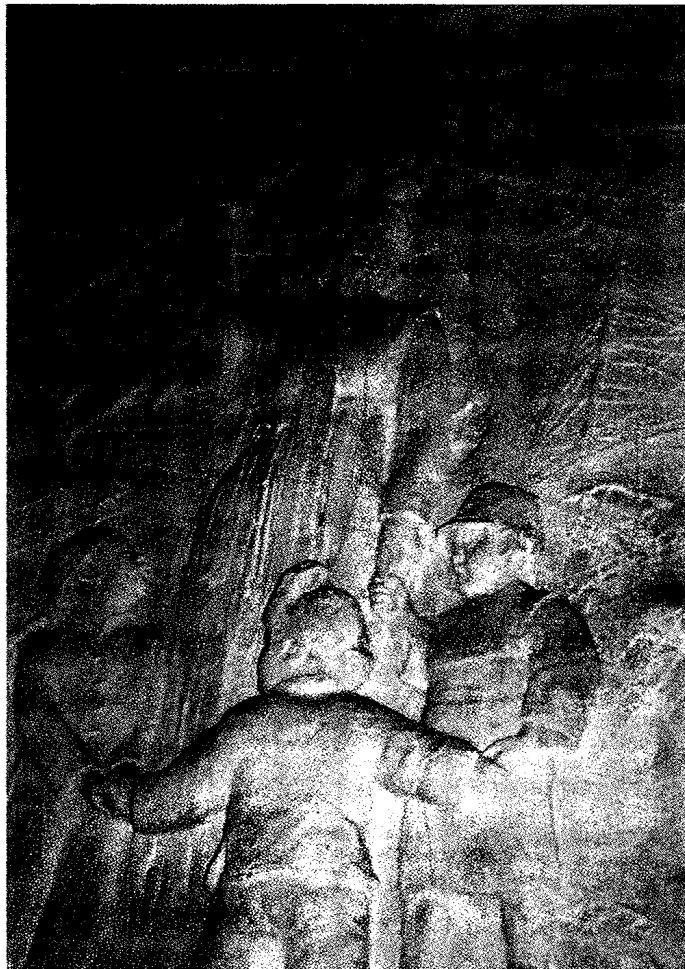
【図8】 新たに建立された「由来碑」



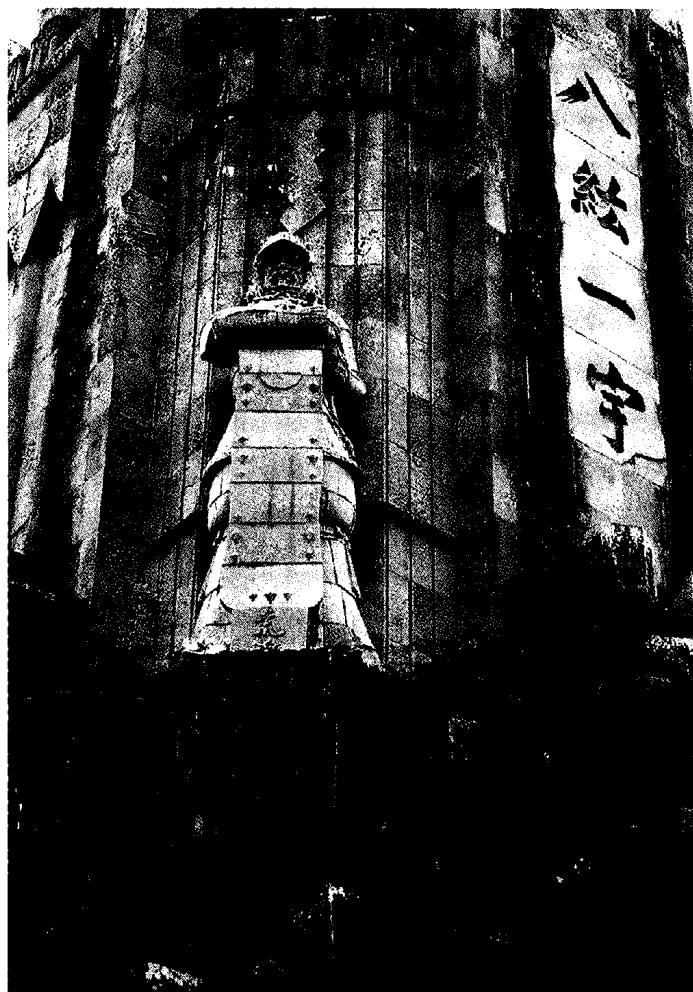
【図9】 塔背面の「八紘之基柱大日本国勢記」があった場所



【図10】 「巖室」内の「大東亜の図」



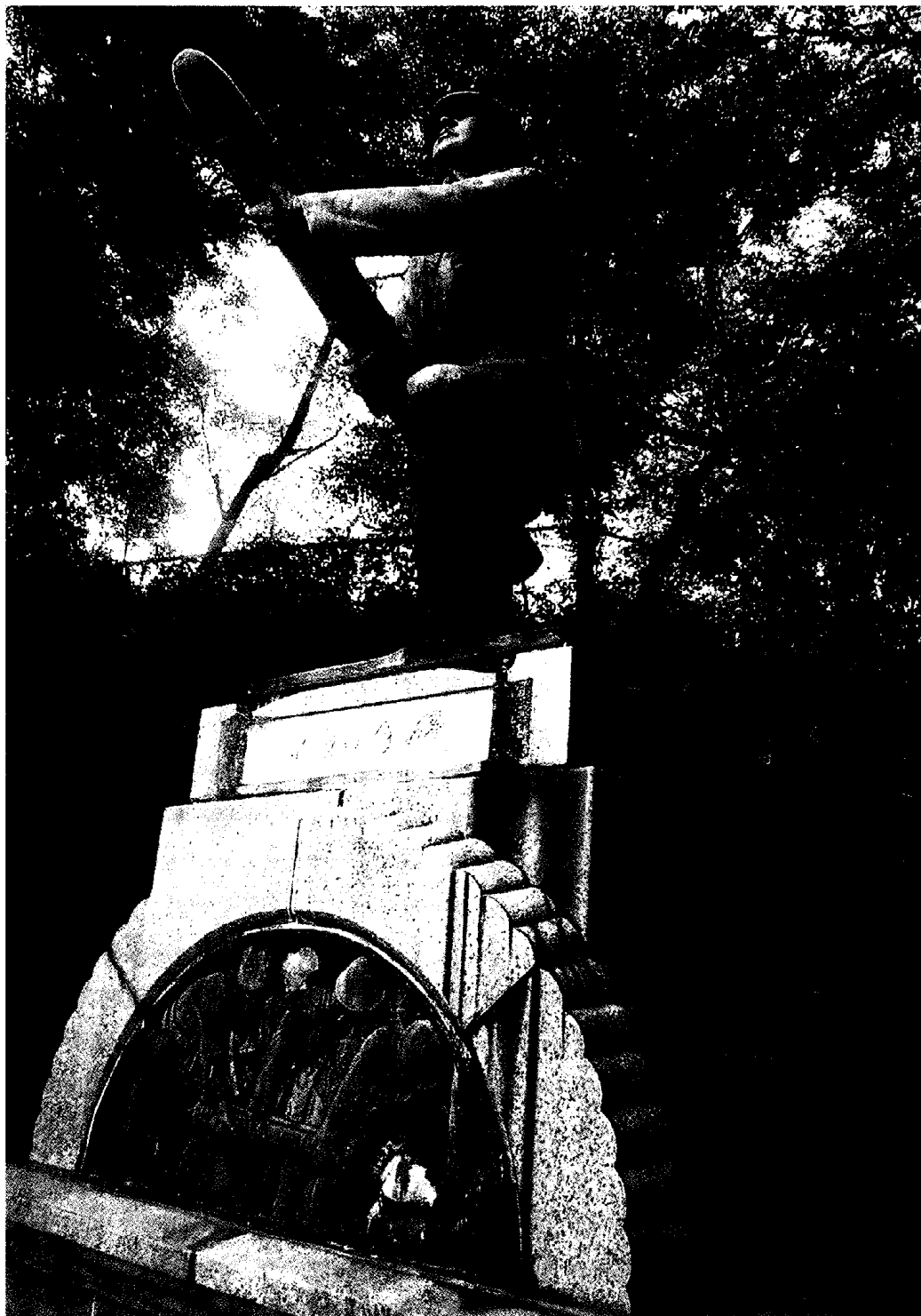
【図11】 「巖室」内の「紀元二千六百年興亜の大業」 (万邦平和)



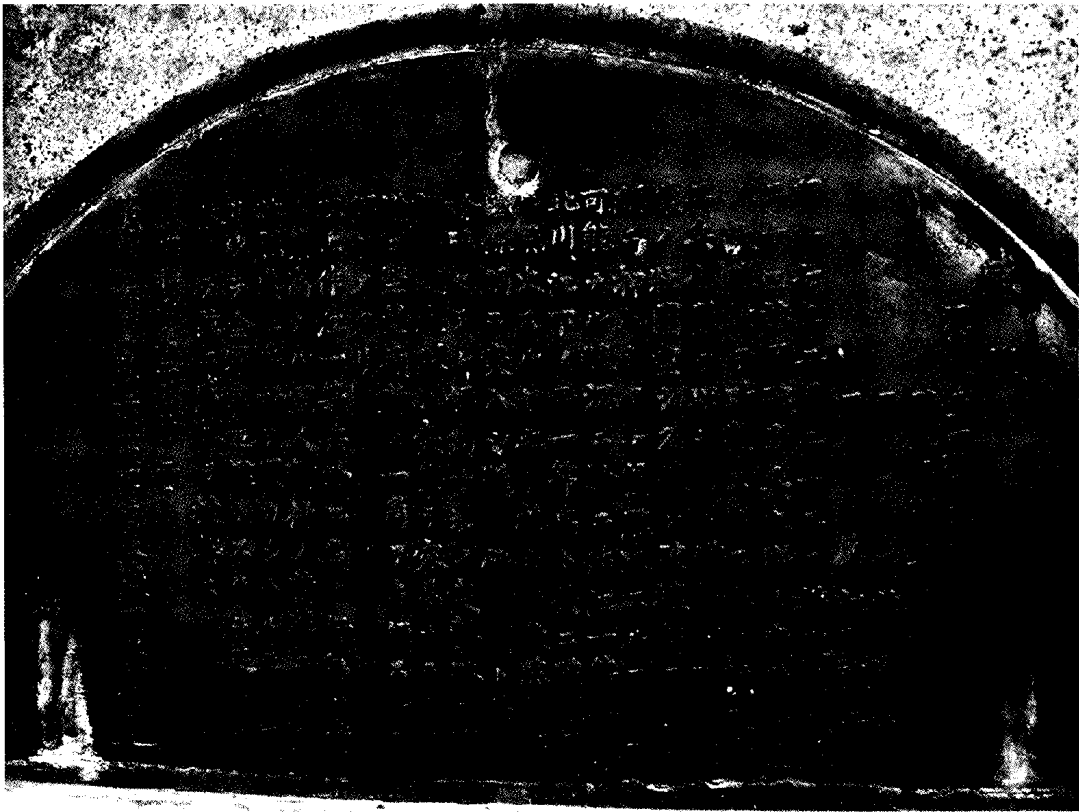
【図12】「復元」された「荒御魂」像



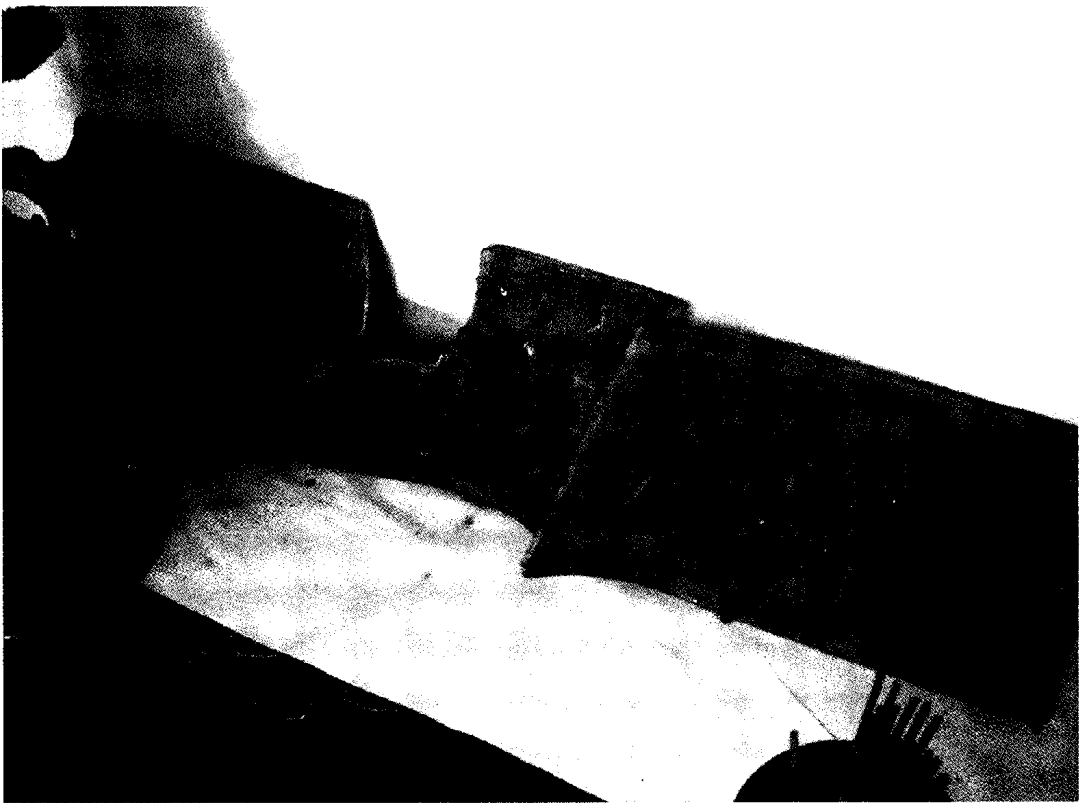
【図13】東京オリンピック記念プレート



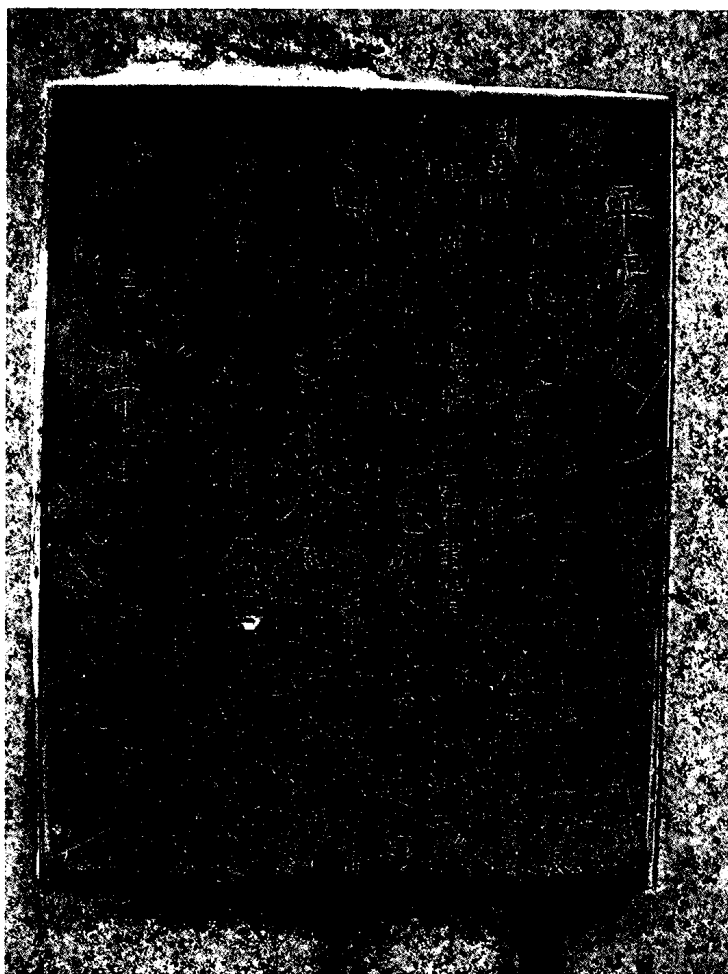
【図14】 長崎県北松浦郡佐々町三柱神社の「平和乃礎」



【図15】 台座背面の「感状」



【図16】 割れた「肉弾勇士北川伍長」の銘板（北川家蔵）



【図17】 台座に刻まれた「平和ノ礎」の由来



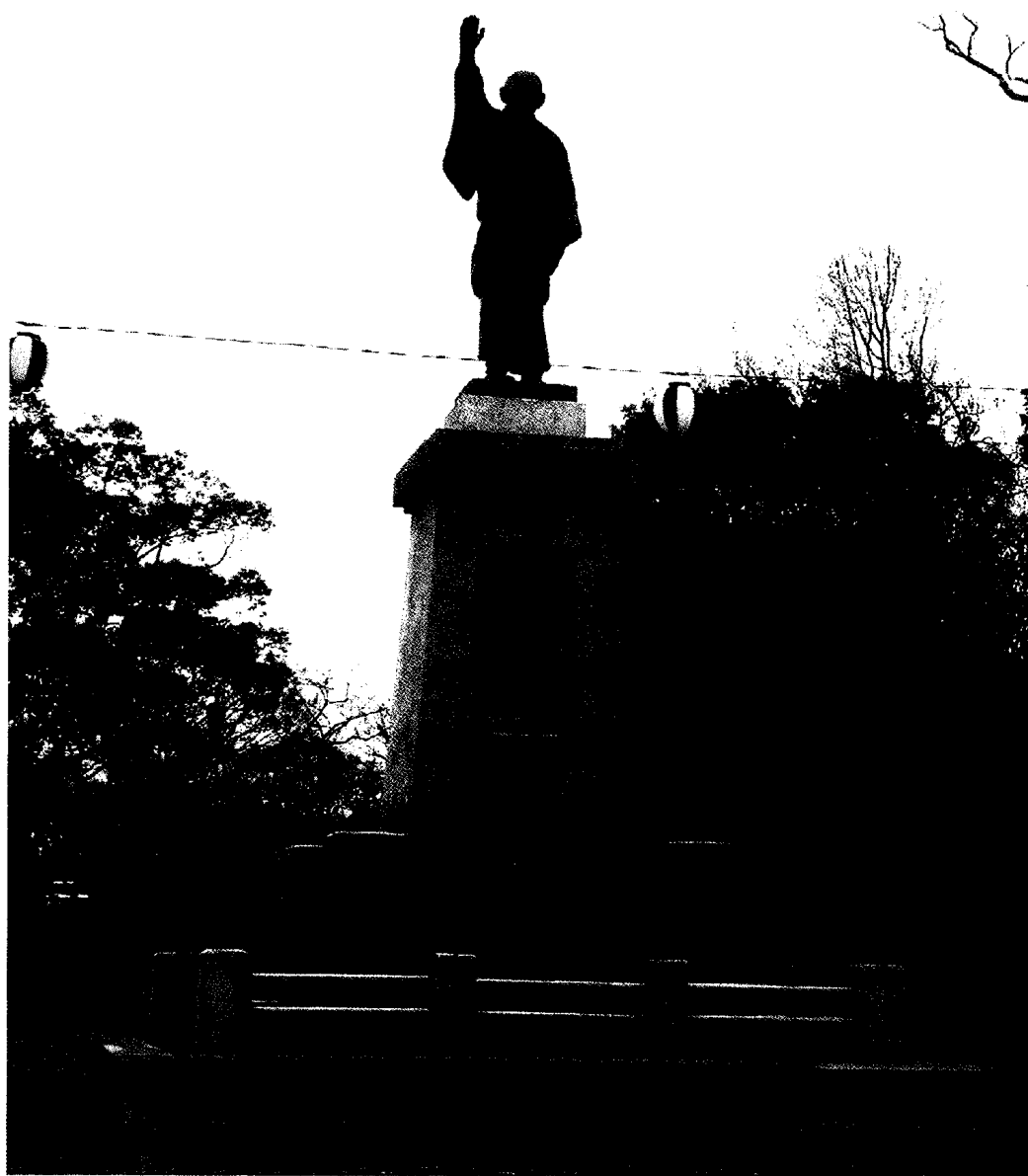
【図18】 絵はがきになった東京都港区青松寺の「肉弾三勇士」像



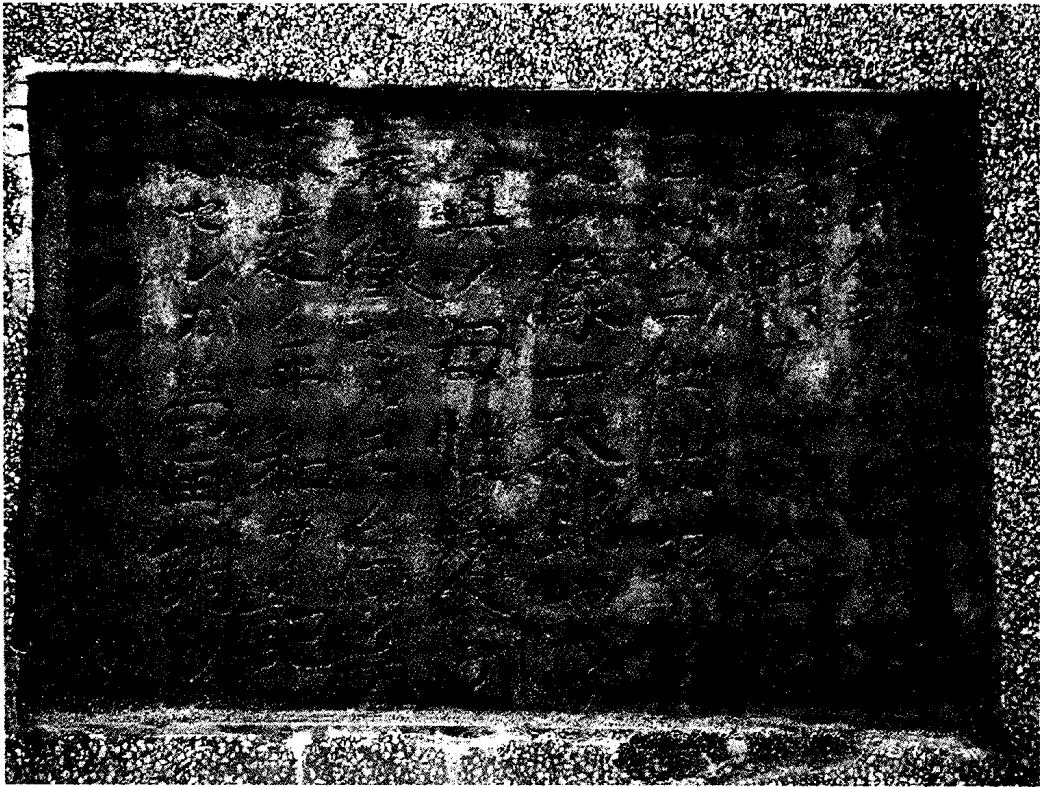
【図19】 青松寺の江下伍長の銅像と「由来碑」 (後)



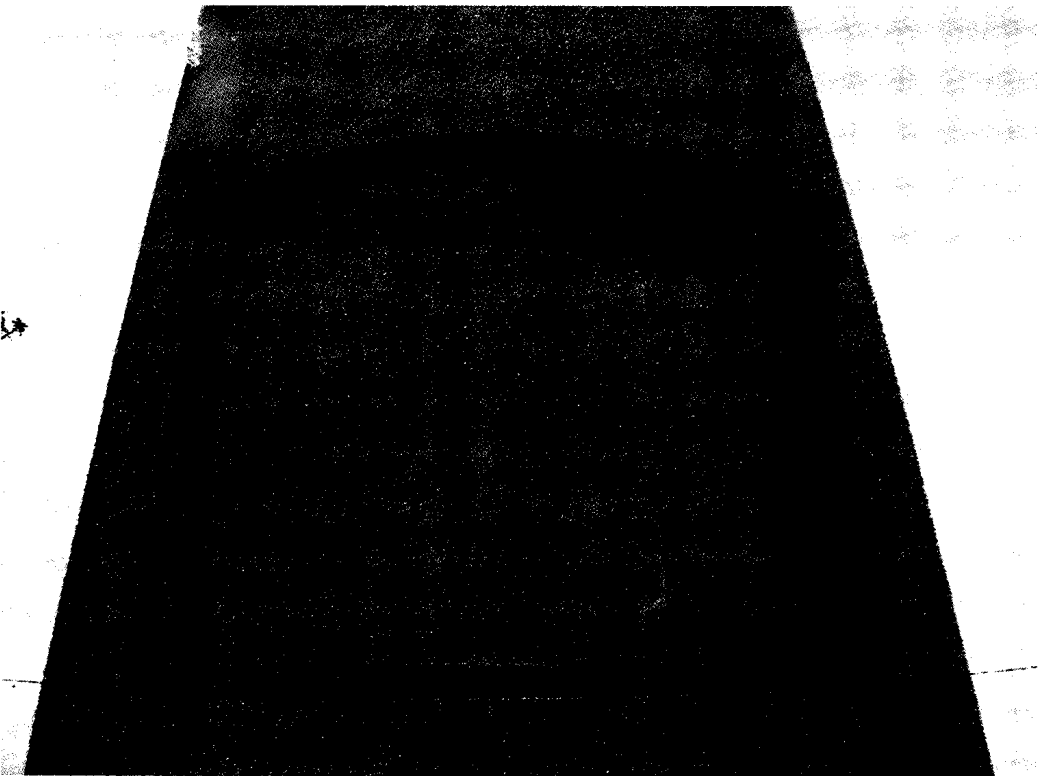
【図20】 三柱神社に建立された「殉国者の塔」(左)と「従軍の碑」(右)



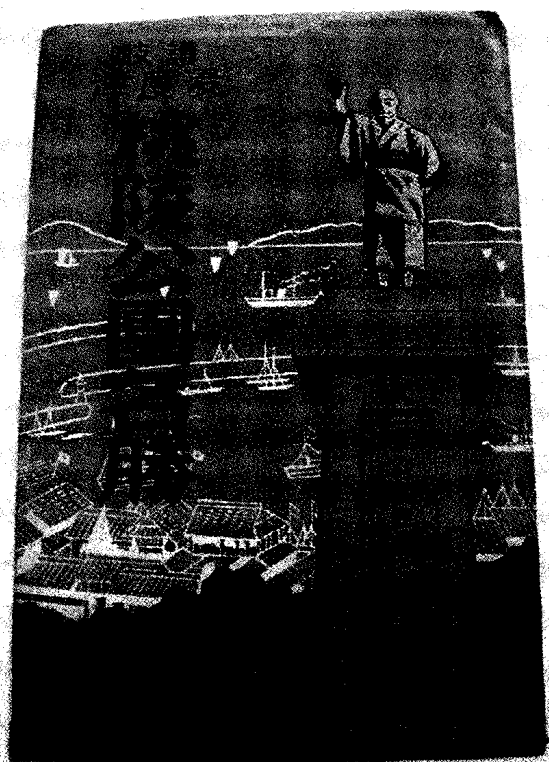
【図21】香川県仲多度郡多度津町桃陵公園の「一太郎やあい」



【図22】 台座に刻まれた由来



【図23】 台座背面



【図24】 絵はがきになった「奉公記念標」



【図25】 「奉公記念碑」

註

- (1) 木下直之『世の途中から隠されていること－近代日本の記憶』晶文社，2002年，71頁。
- (2) 広島市役所編・発行『広島市史 第四巻』1925年，722頁。
- (3) 1946年11月1日に文部・内務次官が地方長官に発令した通牒「公葬等について」の四の(ロ)。大原康男「資料 政教分離に関する政府の通達・回答等集成」『國學院大學日本文化研究所紀要 第88輯』2001年，433頁。
- (4) 前掲『世の途中から隠されていること－近代日本の記憶』72頁。
- (5) 「落下を防止 近く〈タカの塔〉補修」『中国新聞』広島版，1985年2月23日。
- (6) 株式会社建設技術開発研究所『皆実町緑地 平和の塔耐力調査結果報告書』1984年12月3日，9－10頁。
- (7) 浜松五社公園でも，日露戦争後に建立された「誠忠碑」の頂上の金鶏が戦後撤去され，替わりに鳩の像が設置されている。木下直之『ハリボテの町』朝日新聞社，297－298頁。
- (8) 1948年，広島平和記念館の建設と共に原爆の映画化が計画され，中国新聞社が主催して行なわれた「No More Hiroshimas 映画化懇談会」の席上で，「脚本中の軍事訓練は除いた方が良い。それよりも，も少し平和祭の行事を撮影したらどうか（他に同様趣旨の賛成者二，三あり）」という意見に対して，「平和への転換を浮き上らせる為には，必要ではあるまいか。白を強く出す為には，黒を入れる必要がある」という反論がなされている。「映画“No More Hiroshimas”にかんする協議概要」広島市編・発行『広島新史資料編Ⅱ復興編』1982年，407頁。
- (9) 木下直之は「平和塔」が第一回広島平和祭の開催に連動して誕生した可能

- 性を示唆している。前掲『世の途中から隠されていること－近代日本の記憶』72頁。
- (10) 前掲『広島新史 資料編Ⅱ復興編』399頁。
- (11) 「広島こそ平和のメッカ，建設せよピカドン公園・博物館」『中国新聞』1947年7月29日。
- (12) 『ライフ』1947年9月15日号。
- (13) 前掲『広島新史 資料編Ⅱ復興編』解説・解題x ix頁。
- (14) 前掲『広島新史 資料編Ⅱ復興編』402頁。
- (15) 「ヒロシマの記憶－遺影は語る 中島本町Ⅱ」『中国新聞』1999年8月3日。
- (16) 広島市役所編・発行『広島原爆戦災誌 第三巻』1971年，65頁。
- (17) 前掲『広島原爆戦災誌 第三巻』65頁。
- (18) 前掲『広島原爆戦災誌 第三巻』65頁。
- (19) 翌年の第二回平和祭では，塔側面にあった「平和塔」の文字が「祈平和」に替わり，何らかの理由によって変更があったことが窺える。
- (20) 前掲『広島新史 資料編Ⅱ復興編』409－410頁。
- (21) 「永遠に姿消す平和塔」『中国新聞』1951年5月12日。
- (22) 「ヒロシマの記憶－遺影は語る 中島本町Ⅱ」『中国新聞』1999年8月3日。
- (23) 平和記念式典の歴史に詳しい宇吹暁によれば，第四回広島平和祭の中止後の1951年からの式典では，名称，式辞，平和宣言それぞれに慰霊の要素が見られるようになり，式典の雰囲気は慰霊祭に近いものになったとされる。宇吹暁『平和記念式典の歩み』財団法人広島平和文化センター刊平和冊子No.8，1992年，27頁。
- (24) 「平和の塔」の史実を考える会編『石の証言－みやざき「平和の塔」を探

る』本多企画ブックレット，1995年，177頁。なお，同パンフレットは君塚仁彦編著『平和概念の再検討と戦争遺跡』明石書店，2006年に再録されており，本稿では再録版を用いた。頁数は『平和概念の再検討と戦争遺跡』に従う。

- (25) 前掲『石の証言－みやざき「平和の塔」を探る』92頁。
- (26) 前掲『石の証言－みやざき「平和の塔」を探る』187頁。
- (27) 前掲『石の証言－みやざき「平和の塔」を探る』186－187頁。
- (28) 宮崎県議会史編さん委員会『宮崎県会史』宮崎県議会事務局，1966年，278頁。
- (29) 前掲『宮崎県会史』278－279頁。
- (30) 日名子実三「八紘之基柱について」三又たかし『ある塔の物語 甦る日名子実三の世界』観光みやざき編集局，2002年，128－129頁。
- (31) 前掲「八紘之基柱について」128－129頁。なお，塔の内部は通常，非公開となっている。
- (32) 日名子はレリーフを「紀元二千六百年興亜の大業」と呼んでいるが，相川は同じレリーフの写真に「紀元二千六百年（万邦平和）」というタイトルを付けている。相川勝六「八紘基柱－平和塔の由来」『白樺ポリテイクス』No.9，しなの出版，1968年，23頁。
- (33) 「平和の塔」の基台には1720個の切り石がはめ込まれており，「『平和の塔』の史実を考える会」は，この切り石のルーツを訪ねて，それが「平和を祈念する友好のシンボル」などではなく，「侵略者の戦利品であり略奪品であった」として，「八紘基柱」は「戦争の塔」とであると批判している。前掲『石の証言－みやざき「平和の塔」を探る』155頁。
- (34) 文部省『初等科国史 下』1943年，181－186頁。
- (35) 1940年2月11日に出された「紀元二千六百年の勅語」でも「国体ノ精華

ヲ發揮シ、以テ時難ノ克服ヲ致シ、以テ国威ノ昂揚ニ勗メ、祖宗ノ心靈ニ
対ヘンコトヲ期スヘシ」とされている。

- (36) 宮崎市史編纂委員会『宮崎市史 第4巻』宮崎市, 1959年, 824頁。
- (37) 宮崎県編・発行『宮崎県政八十年史 下巻』1967年, 1090 - 1091頁。
- (38) 宮崎市史編さん委員会『宮崎市史 続編(下)』宮崎市役所, 1978年,
1063頁。
- (39) 前掲『宮崎県政八十年史 下巻』1091頁。
- (40) 前掲『宮崎県政八十年史 下巻』1091頁。
- (41) 山口誠『グアムと日本人 戦争を埋め立てた楽園』岩波新書, 2007年,
93 - 94頁。
- (42) 前掲『宮崎市史 続編(下)』1063頁。
- (43) 前掲『宮崎県政八十年史 下巻』1091頁。
- (44) 前掲『宮崎県政八十年史 下巻』1092頁。
- (45) 前掲『ある塔の物語 甦る日名子実三の世界』118頁。
- (46) 相川勝六『思い出ずるまま』講談社出版サービスセンター, 1972年, 239
頁。
- (47) 前掲「八紘基柱 - 平和塔の由来」29 - 30頁。
- (48) 前掲「八紘基柱 - 平和塔の由来」29頁。
- (49) 前掲『ある塔の物語 甦る日名子実三の世界』64 - 65頁。
- (50) 『朝日クロニカル 週間20世紀 1931 - 32』朝日新聞社, 2000年, 22
頁。
- (51) 当時の新聞によると「肉弾三勇士」に付与された「感状」の日付は「昭和七
年三月十九日」となっており, 銅像台座に刻まれた「感状」の日付と食い
違っている。「所属部隊凱旋の日 肉弾三勇士へ感状 植田師団長から」
『朝日新聞』1932年3月20日。

- (52) 「肉弾三勇士の銅像 北村西望氏が作る 奇しき縁 同氏も元工兵」『朝日新聞』1932年3月19日。なお、同紙によれば、彫刻家北村西望も、かつて久留米の工兵第十八大隊に一年志願兵として籍があったとされる。
- (53) 北川伍長の生家の隣に建てられた資料館には、三つに割れた状態の「肉弾勇士北川伍長」の銘版が保管されており、敗戦時に台座から引き剥がされたものと推定される。また、銅像台座背面に刻まれた「感状」には、軍隊の星印が取り除かれたような痕跡が見られ、これも敗戦時に除去されたのではないかと思われる。
- (54) 佐々町教育委員会編・発行『佐々町郷土史』2004年、480頁。
- (55) 「北川伍長村葬」『朝日新聞』1932年3月30日。
- (56) 「“いざ弾丸に、軍艦に” 銅像・大挙して応召」「遺骨を胸に老母の死 金属供出彩る感激話」『朝日新聞』1943年3月15日。
- (57) 古川誠助編『肉弾三勇士像建設会報告書』（青松寺境内）肉弾三勇士銅像建設会、1936年、4 - 7頁。
- (58) 前掲『肉弾三勇士像建設会報告書』24頁。
- (59) 前掲『肉弾三勇士像建設会報告書』8 - 9頁。
- (60) 前掲『肉弾三勇士像建設会報告書』25 - 27頁。
- (61) 前掲『肉弾三勇士像建設会報告書』31 - 32頁。
- (62) 前掲『肉弾三勇士像建設会報告書』34頁。
- (63) 文部省『初等科国語 二』1942年、116 - 123頁。
- (64) 1945年9月20日に出された文部次官通牒「終戦ニ伴フ教科用図書取扱方ニ関スル件」によって「肉弾三勇士」は全文削除となっている。岩本努「敗戦と教科書」『複刻 国定教科書（国民学校期）解説』ほるぷ出版、1982年、186頁。
- (65) 1947年2月18日に中国大使館からGHQに向けて、「肉弾三勇士像」は靖

国神社灯籠のレリーフと共に撤去すべきという文章が送られ、2月26日には中国大使が「中国の新聞社代表の訪問が予定されており、軍国的な銅像等の存在が将来の中日関係の障害になる」との見解を示したことから、急いで撤去の準備が行なわれ、3月3日の現地調査では撤去が確認されたとされる。平瀬礼太「戦争と美術コレクション—そこにはならないもの」木下直之編『講座日本美術史 第6巻 美術を支えるもの』東京大学出版会、2005年、154頁。

- (66) 1933年（昭和8年）1月15日に八王子高等小学校において開催された「肉弾三勇士銅像建設会」主催の講演会で、金杉はこのように「三勇士」を称えている。前掲『肉弾三勇士像建設会報告書』18, 22頁。
- (67) 前掲『ハリボテの町』299頁。
- (68) 多度津町誌編集委員会『多度津町誌—本誌—』多度津町、1990年、362頁。
- (69) 氏家睦夫「多度津港史話」塩田光夫編『亜流 五十号』亜流社、1975年、108頁。
- (70) 「百年の火 35 栄光の記録—一太郎やあい」『サンケイ新聞』香川版、1968年3月7日。
- (71) 「百年の火 36 栄光の記録—一太郎やあい」『サンケイ新聞』香川版、1968年3月8日。
- (72) 前掲『多度津町誌—本誌—』831頁。
- (73) 多度津町出身の福山大学教授鎌田輝男氏の証言および1950年に撮影された写真に基づく。同氏が開設している多度津町立資料館ホームページを参照。
- (74) 「百年の火 28 栄光の記録—一太郎やあい」『サンケイ新聞』香川版、1968年2月21日。
- (75) 「百年の火 37 栄光の記録—一太郎やあい」『サンケイ新聞』香川版、1968年3月9日。

- (76) 前掲『多度津町誌－本誌－』495頁。
- (77) 米田明三「一太郎ヤーイその後のことなど」『銀杏』堪然寺内銀杏の会，1978年，45頁。
- (78) 前掲「一太郎ヤーイその後のことなど」46－47頁。
- (79) 文部省『初等科国語 六』1943年，12頁。
- (80) 『若い香川』創刊号，青少年育成香川県民会議，1968年，1頁。
- (81) 前掲『若い香川』8頁。
- (82) 五十嵐恵邦『敗戦の記憶－身体・文化・物語1945～1970』中央公論新社，2007年，279頁。
- (83) 空辰男『加害基地宇品 新しいヒロシマ学習』汐文社，1994年，78頁。
- (84) 前掲『石の証言－みやざき「平和の塔」を探る』182－184頁。
- (85) 石井雍大「一太郎やあいの虚像と実像－つくられた愛国心－」同著『あしたの教育－教育改革の基本方針－』あゆみ出版，1977年。なお，初出は香川県歴教協「一太郎やあいをめぐって いまもつかえる“祖国愛”の教材……」『歴史地理教育』1968年9月号。
- (86) 小関隆「コモレイションの文化史のために」阿部安成他編『記憶のかたち コモレイションの文化史』柏書房，1999年，7－8頁。
- (87) 文部省がまとめてGHQの宗教文化資源科に提出した報告書。大原康男『神道指令の研究』原書房，1993年，221頁。なお，「軍国主義又は超国家主義的思想の宣伝鼓舞を目的とするものは撤去する」とした1946年11月1日の「公葬等について」に続いて，1946年11月17日に内務省警備局長より出された「忠霊塔忠魂碑等の措置について」では，「単に忠霊塔，忠魂碑，日露戦役記念碑等戦没者の為の碑であることを示すに止るものは原則として撤去の必要はない」とされ，撤去に関してより緩やかな表現に変わっている。前掲「資料 政教分離に関する政府の通達・回答等集成」

450頁。

- (88) GHQの世論・社会学調査班及び文化資源班が関わった1946年7-9月の調査。28人には柳田国男，志賀直哉らが含まれている。前掲「戦争と美術コレクション-そこにあってはならないもの」150-151頁。
- (89) 前掲「戦争と美術コレクション-そこにあってはならないもの」152頁。
- (90) 福間良明『殉国と反逆』青弓社，2007年，46頁。「特攻」の語りの戦後史を研究する福間良明は，「特攻」の記憶表象を評して，このように表現している。
- (91) M. アルヴァックス，小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社，1989年。
- (92) パトリック・H・ハットン，村山敏勝訳「現代史学における記憶の位置づけ」『現代思想』1995年1月号，青土社，149-150頁。
- (93) テッサ・モーリス＝スズキ「記憶と記念の脅迫に抗して」『世界』2001年10月号，岩波書店，38頁。
- (94) 歴史教育の立場から原田智仁は，歴史を読み解く力＝歴史リテラシーの育成を掲げ，銅像・記念碑を教材として用いることを提唱している。原田智仁「世界史教育の改善 歴史リテラシーの可能性(7) 銅像・記念碑の読み解き」文部科学省教育課程科編『月刊 中等教育資料』平成16年4月号，42-43頁。
- (95) 前掲『世の途中から隠されていること-近代日本の記憶』224頁。木下直之は，社会から「忘れられた銅像」を取り上げる意義を，このように表現している。

図版出典

- 【図1】 著者撮影（2002年4月）。
- 【図2】 著者撮影（2008年3月）。
- 【図3】 広島県庁編『廣嶋臨戦地日誌』日新舎，1899年，775頁。
広島県公文書館の許可を得て複写。
- 【図4】 株式会社建設技術開発研究所『皆実町緑地 平和の塔耐力調査結果報告書』1984年12月3日，10頁。
広島市南区公園管理課の許可を得て複写。
- 【図5】 広島市南区公園管理課提供（撮影2008年1月）。
- 【図6】 著者撮影（2007年9月）。
- 【図7】 著者蔵。
- 【図8 - 17】 著者撮影（2007年9月）。
- 【図18】 著者蔵。
- 【図19】 著者撮影（2006年5月）。
- 【図20】 著者撮影（2007年9月）。
- 【図21 - 23】 著者撮影（2007年3月）。
- 【図24】 多度津町立資料館蔵。同資料館の許可を得て複写。
- 【図25】 著者撮影（2007年3月）。

謝 辞

本研究にあたっては、宮田研究奨励金を御交付頂いた朝日大学理事会並びに理事長に対し感謝の意を表すと共に、フィールド・ワークに際して御教示・御協力頂いた広島平和記念資料館、広島市南区公園管理課、宮崎県都市公園総合事務所、佐々町教育委員会、北川公氏、青松寺、多度津町立資料館に対し、心より御礼申し上げます。